

朴一昊教授指導
碩士學位請求論文

『今昔物語集』卷十に関する一考察

-震旦説話の変容方法を中心に-

2006

誠信女子大學校大學院

日語日文學科

辛孝羅

『今昔物語集』卷十に関する一考察
- 震旦説話の変容方法を中心に -

朴 一 昊 教授指導

이 論文을 碩士學位論文으로 提出함

2006年 5月

誠信女子大學校 大學院

日語日文學科

辛 孝 羅

認 准 書

辛孝羅의 碩士學位論文으로 認准함.

審査委員_____印

審査委員_____印

審査委員_____印

誠信女子大學校 大學院

論文概要

이 논문은 일본 최대의 설화집인 『곤자쿠모노가타리슈(今昔物語集)』의 권10 진단부(震旦部) 세속(世俗)설화를 텍스트로 하여 영향 관계가 있는 선대 문헌 자료를 통해서 그 수용과 변용의 모습을 고찰한 것이다.

권10에 대한 지금까지의 선행연구가 출전의 추적 혹은 권10의 구성에 관한 것에 한정된 것에 비해서, 본고에서는 해당 설화를 선대의 공통설화와 비교·분석하여 수용된 것과 변용된 것으로 구분하였다. 특히 변용에 있어서는 단순히 플롯의 변화만을 지적한 것이 아닌, 인물·소재·주제를 중심으로 다각적인 변화의 양상을 분석하여 경향성을 찾고자 하였다.

비교·분석의 방법으로는 제2장에서는 선대 일본 문헌 자료 중에서, 오늘날 권10의 유력한 출전으로 지목되는 가나문의 가론서 『도시요리즈이노(俊頼髓腦)』와의 공통화를 비교분석하여 수용관계를 명확히 하고자 했다. 또한 한문체 설화집 『츠크센(注好選)』과의 공통화를 비교분석하였으며 권10과는 어떠한 수용관계가 있는지 고찰하고자 하였다.

한편으로는 한문체로 기록된 『注好選』이 한적의 매개체로서 권10에 어떠한 영향을 주었는지 조사하기 위하여 한적 『몽구(蒙求)』의 공통화까지 3차원적인 비교를 하였다.

제3장에서는 권10에서 아직 출전이 밝혀지지 않는 설화를 그 원거가 되는 한적과 공통화를 비교하는 것으로서 그 수용과 변화의

관계를 고찰해 보고자 하였다.

그 처음으로, 권10의 설화 중 4화의 설화가 『장자(莊子)』를 출전으로 하고 있음에 착안하여 그 공통화를 비교분석하였다. 그 결과 권10과의 『장자』 관련 공통화는 원거의 여러 편에서 유명 일화들을 추출하여, 하나의 설화로 묶어서 원거 『장자』와 다른 주제를 이야기하는 경향성을 나타내었다. 특히, 어려운 사상이나 관념적 이야기는 배제시키고 단순화 시켜서 주제와의 연결을 노렸다.

한편, 권10의 『사기(史記)』를 원거로 하는 최초의 3화에서는, 편자가 주제의식을 나타내기보다는 역사사실을 전달하려고 하였으며, 이 과정에서 『사기』의 대표적 소재를 차용하여 새로운 설화를 조직하였다.

또한 위의 원거처럼 다수의 설화를 가지지 않는 『춘추좌씨전(春秋左氏傳)』과 『몽구』의 공통화를 비교분석하여 그 수용과 변화를 양상을 고찰하였다. 『춘추좌씨전』에서는 소재의 차용은 물론 원거에 없는 후일담이 추가되어, 성어의 유래담을 설명하고자 하는 편자의 의도를 뒷받침하게 하였다. 『몽구』에서는, 『곤자쿠모노가타리슈』에서 뒷부분이 삭제된 의도를 분석하기 위해, 동시대의 일본 번안 설화집인 『가라모노가타리(唐物語)』와의 비교를 통해서 주제의 변화를 위함이었음을 명확히 하였다.

目 次

論文概要

I. 序論

1. 『今昔物語集』 卷十の構成と先行研究……………1
2. 研究の目的と方法 ……………5

II. 和文資料の受容と変容

1. 『今昔物語集』 卷十における『俊頼髓脳』……………8
 - (1) 『今昔物語集』の『俊頼髓脳』借用……………9
 - (2) 『今昔物語集』の『俊頼髓脳』変容……………20
2. 『今昔物語集』 卷十における『注好選』……………31
 - (1) 漢籍の媒介としての『注好選』……………32
 - (2) 『注好選』の受容……………41

III. 漢籍の借用と変容

1. 『莊子』 関連説話の主題変化……………50
2. 『史記』 からの素材借用……………68
3. 『春秋左氏伝』と『蒙求』の関わり……………79
 - (1) 『春秋左氏伝』からの発展……………79
 - (2) 『蒙求』の簡略化……………82

IV. 結論……………87

参考文献

ABSTRACT

I. 序論

1. 『今昔物語集』 卷十の構成と先行研究

『今昔物語集』¹⁾(以下『今昔』と略す)は日本最大の説話集で、平安末期、院政時代に成立したとされる。およそ、1120年前後、白河院政のころと推定されているが、はっきりした成立年時は不明であり、その編者も現在のところ明らかでない。全編が「今ハ昔」で始まり「トナム語り伝へタルトヤ」で終わる説話一千数十話を収め、それが三十一巻に分かれ(ただし、そのうち巻八・十八・二十一の三巻が欠けている)、第一巻～第五巻が天竺の仏教説話、第六巻～第九巻が震旦の仏教説話、第十巻が震旦の世俗説話、第十一巻～第二十巻が本朝の仏教説話、第二十二巻～第三十一巻が本朝の世俗説話となっている。

このうち、七百余話の仏教説話は天竺・震旦・本朝の三国を通し同一の仏教的基準のもとに整理・配置され、三国ともはじめに仏教の発生流伝の説話を順序に従って並べ、ついで三宝(仏・法・僧)の靈驗功德を仏・法・僧の順に配置し、最後に因果応報談を置いている。巻二十二以下の世俗説話も一方では仏教説話の組織に倣いながら、一方では独自の文化的・社会的基準のもとに巻別に配置している。

『今昔』 卷十に関する大きな研究の流れはその構成についての研究であった。国東文磨は『今昔物語集成立考』²⁾で、第1話から第7話までを

1) 小峯和明『今昔物語集 二』新日本古典文学大系33(岩波書店、1999年)

『今昔』 卷十の例文引用は岩波書店の新大系による。

2) 国東文磨『今昔物語集成立考』(早稲田大学出版部、1976年、初出1962年)

震旦国家の創立と展開の説話とみなしたが、後日、第1話から第8話までと訂正した³⁾。これ以外、森正人が第1話から第8話までを王朝史とみなし⁴⁾、池上洵一も第1話から第8話までを王・后(王朝史)とみなしたが⁵⁾、小峯和明は第1話から第7話までを王朝・国王史話として分類している⁶⁾。

これらの説は、第1話から第8話(第7話)が震旦の歴史を語る説話群であり、本朝部の卷二十一と対応しているという点において同じ意見を示しているが、第8話については異なる意見を示している。すなわち、第8話「震旦呉招孝、見流詩恋其主語」は見方によっては、王朝譚に続く賢人譚に属する話としてと見ることもできるが、第8話をそこに配置した『今昔』編者の構成意識を考えると、王朝と関連するものとして見るのが正しい。なぜならば、この話は前話である第7話の楊貴妃の話と関連要素でつながっており、いわゆる編者の二話一類様式⁷⁾の配列方式により現在の位置に配されたといえるからである。したがって、王の束縛から自由になった女御の話に重点が置かれているはずで、王や王后に関わる話をまとめた震旦の王朝譚と分類した方が正しいと考えられる。

また、国東は第8話から第15話までを聖賢譚として分類し、本朝部の卷二十二の藤原列伝話と卷二十四の芸道話に対応していると説いたが、後日、講談社学術文庫『今昔物語集(9)』では第9話から第15話までが対

3) 国東文磨 講談社学術文庫『今昔物語集(9)』(講談社、1984年)

4) 森正人「説話形成と藤氏史・兵史」『国語と国文学』56巻10号(至文堂、1979年 10月)

5) 池上洵一『今昔物語集 9 震旦部』東洋文庫(平凡社、1980年)、『説話文学の世界』(世界思想社、2000年、初出1987年)

6) 小峯和明「今昔物語集震旦部の形成と構造」『今昔物語集の形成と構造』(笠間書院、1985年)

7) 国東文磨の発見になる『今昔物語集』の説話配列の様式であり、二話一類ともいう。巻における説話配列が〔1・2〕-〔3・4〕(数字は説話番号)のように、二話ごとが連想によって一つの構成単位をなしつつ、連想する他の構成単位ともなにかの連想契機でつながっている。

応すると訂正した。その後続く話群については、第16話から第20話の武士譚までが本朝部の卷二十三の強力譚、卷二十五の武道譚と対応すると主張した。

これに対して森は、第9話から第14話までは賢人伝として卷二十二と対応し、第15話から第18話までは武人伝として卷二十三と対応することを述べた。池上は第9話から第15話までは賢者仙人、第16話から第22話までは武人信義、第23話から第27話までは学芸風雅、第28話から第35話までは国王諸譚、第36話から第40話までは雑話に分類した。

また、小峯は第8話から第15話までは賢人譚として卷二十二と対応、第16話から第22話までは武人譚として卷二十三・卷二十五と対応、第23話から第27話までは芸道話として卷二十四と対応、第28話から第36話までは国王国家関係話として卷31(一部)と対応、第37話から第40話までは雑話として本朝部と対応すると述べた。

これらの分類と本朝部との対応関係を見ると、ほとんど同じ見方を示していることが分かる。ただ、前述したように分類の境界の設定において少し差がある。たとえば、第15話「孔子、為教盗跖行其家怖返語」について森は武人伝とみなしているが、国東、池上、小峯は賢人伝に属する話とみなしている。また、第36話「姫毎日見卒塔婆付血語」についても池上と小峯が異見を示しているが、この第36話は小峯が分類したような国王国家関係話とはいえないだろう。しかし、第15話については、森は盗跖に重点をおいて分類し、他の学者らは孔子に重点をおいて分類することにより、上記のような差ができたと考えられる。この場合も『今昔』編者の構成意図を考えれば、第15話は第9話から続く賢人譚として分類すべきであり、盗跖のエピソード

ソードは後に続く武人譚につなぐためのものであるとみたほうが正しいと思われる。

このような分類の差が生じる最も大きな理由として挙げられるのは、上記のいわゆる二話一類様式という『今昔』の説話配列様式である。『今昔』の説話は隣接する説話との、関連性に基づいて配列され、しかも一括された説話群と続く説話群との間にもこの連想契機が存在しているため、説話の分類においてその区分が異なる場合はあり得る。

また、『今昔』巻十に関する研究のもう一つの軸は、出典研究であった。しかし、巻十を中心とする独自の研究というよりは巻六から始まる震旦部の説話の出典研究⁸⁾の一環として行われた。しかし、仏法部に比べ出典関係が明確ではない点もあって、世俗部の研究はそれほど関心の対象とならなかった。最近になって『俊頼髓脳』との関係が認められるようになり⁹⁾、さらに『注好選』が発見され、その研究の結果によって¹⁰⁾、巻十の研究も活発になった。しかし、『今昔』巻十の資料は、一元的資料に依っただけではなく、今は散佚した和文資料に依るものが少なくなかった。また、今日までもその原拠さえ明らかになっていない説話も数多い。このような背景により巻十の多数の説話の研究は類話探し程度で留まっている。

8) 『三宝感應要略集』『冥報記』『孝子伝』が巻六から始まる震旦部の出典になっているのは既存の研究で明らかになっている。- 注1)前掲書の解説参考。

9) 橘健二「『今昔物語集』と『俊頼髓脳』との関係」『奈良女子大学附属高校研究紀要』第5集(奈良女子大学附属中等教育学校、1962年12月)と今野達「『今昔物語集』の成立に関する諸問題―『俊頼髓脳』との関係を糸口に―」『解釈と鑑賞』臨時増刊号(至文堂、1963年1月)の以降定説になっている。

10) 今野達「『注好選』について―附私『聚百因縁集』成立考―」『国語』(東京文理科大学国語国文学会、1953年9月)は今のところその影響関係が修正されたが、『今昔』との影響関係を言及した意義がある。

2. 研究目的と方法

『今昔』研究は、依拠資料の探索に始まったといってもよい程度であった。しかし、新しい資料が出現し、直接の依拠資料か否やかの認定方法も厳密となって、従来の研究は修正を余儀なくされている。従来、天竺編の主要な資料とみられていた『法苑珠林』『大唐西域記』『賢愚経』『撰集百縁経』などの類書や経典は、それらより一層依拠資料としてふさわしい『注好撰』¹¹⁾の善本や、『百因縁集』などが出現したため、依拠資料の座から下りることになった。震旦編世俗部の資料とみなされていた『史記』『漢書』なども同様であった。

『今昔』は、複数資料が合成され、それを独自の文体に改める固有の説話創りの方法によって編纂された。この方法を依拠資料の当否の判定に援用すれば、依拠資料とみなされる文献との相違や距離を、単純に潤色あるいは口語りの介在のように処理してしまうことはできない。

震旦部の世俗説話を収めている巻十は、中国故事の宝庫である。しかし、それらの中国故事は、震旦部の仏法篇である巻六～九の如く『三宝感応要略録』や『冥報記』のような中国の資料¹²⁾だけに依拠したものではない。巻六の仏法伝来の話群が『打聞集』に共通しているように、巻十の孔子や荘子の話の多くが『宇治拾遺物語』に共通するといった点から、日本の資料によっているものも多いと推定される。

また、和歌の注釈として説話を用いた源俊頼の『俊頼髓脳』¹³⁾は、

11) 従来「続群書類従」に収められた『注好選集』という書名で知られていたが、その後発見された東寺観智院本、金剛寺本などの古写本によって、正式な書名は『注好選』であることが明らかになった。これらの古写本により、従来の諸本に欠落していた下巻が補われ、中巻の欠脱話も補充された。

12) 注8)参考。

『今昔』巻十と直接的関係が認められる¹⁴⁾。『今昔』編者は『俊頼髓脳』の説話から和歌を排し、中国の故事だけを引用した。『俊頼髓脳』の説話は、中国の故事とは異なり、既に日本で作り変えられた話である。すなわち、説話は和歌を詠むうえでの基本となっていたことを示している。故事を作り変え、編み変える営みは、歌語りの世界でも文字の世界でも不断に行われてきたものである。その延長に『俊頼髓脳』があり、『今昔』もある。

なお、『俊頼髓脳』以外、『今昔』巻十の出典として注目されているのが『注好選』である。現在のところ、確かな出典と認められているのは『俊頼髓脳』だけであるが、『注好選』の場合、巻十と数多い説話を共通としながら、天竺部や震旦部の仏法篇との共通話も少なくない。

『今昔』巻十は、古代中国の世俗説話集であるゆえ、漢籍を除いては考えられない。しかし、漢籍にまつわる研究は、先述のように日本資料が発見されてから現在に至るまで、『今昔』巻十の原拠探しの程度で留まっている。また、このような研究の渋滞は日本資料の研究も同様である。『今昔』巻十の資料となった『俊頼髓脳』や『注好選』巻十における先行研究もその構成と出典の問題に集中しており、説話自体の研究は十分とはいえない。

従って、本稿では『今昔物語集』巻十をテキストとして、先代の説話との共通説話を比較分析し、その受容・変容の関係を明らかにする。特に、変容において単なるプロットの変化だけを指摘するのではなく、人物・素材・主題を中心に多角的变化の様相を分析して傾向性を探る。

13) 本文の引用は、橋本不美男 校注 日本古典文学全集50 歌論書所収 (小学館、1988年)による。

14) 池上洵一・藤本徳明 『説話文学の世界』 (世界思想社、1987年) 77~78頁。

その方法として、まず、『今昔』巻十の出典とみなされる仮名文の歌論書『俊頼髓脳』及び漢文体の説話集『注好選』との共通話を比較分析して受容と変化の様相を探る。また、漢籍の媒介体として『注好選』が果たした役割を調べるために、漢籍『蒙求』との共通話を視野に入れて多角的に分析をする。次に、未だ出典が明らかになっていない説話を、原拠である漢籍との共通話を比較分析することによって、その受容と変化の関わり方を考察してみたい。

Ⅱ. 和文資料の受容と変容

1. 『今昔』巻十における『俊頼髓脳』

巻十は震旦説話の仏法部に比べ、直接用いた資料の不明な例が多く、一応出典扱いされるのは『俊頼髓脳』だけである¹⁵⁾。大半の資料が不明なのは、和文に翻案改変された資料が使われ、今は散佚したためであろう。

『俊頼髓脳』は天永二年(1111)から永久二年(1114)の頃の源俊頼による歌論書である。これは源俊頼が関白藤原忠実の命をうけて、その娘高陽院泰子のために作呈したものと推定され、歌体・歌病・秀歌・風体・歌枕・異名・歌詞・連歌等々、話題は多岐にわたる¹⁶⁾。また、もとより和歌についての概説、歌作にあたっての手引きとなるべく編まれたものであるが、引例の歌の作歌事情は比較的詳しく述べられている。さらに、歌詞の解説についても古伝説・古伝承が多く紹介されており、編者の説話的世界への関心・好尚をうかがい知ることができる。

『俊頼髓脳』と関わる『今昔』巻十の話は、四十話のうち、第4、5、7、8、9、29、30の七話である。その中で、第5、7話は『今昔』との直接関係を断定しにくいという指摘もあるが¹⁷⁾、該当の説話の展開を見ると両書との間に直接関係があることは否定できない。小峯は、王昭君の話(5)で

15) 注9) の前掲書。

16) 三木紀人(編)『今昔物語集・宇治拾遺物語必携』(学灯社、1990、1988初出) 190頁。

17) 注6) の小峯和明の前掲書。

『俊頼髓脳』にない琵琶を弾く場面のあるところや、楊貴妃の話(7)で弘農・陳玄礼という独自の地名・人名が入ったところを指摘しながら、『今昔』との直接関係を断定しにくいと述べた。また、細部の表現の相異があることを指摘しながら、特に巻十で問題になるのは、白氏文集で名高い上陽人の話(6)が『俊頼髓脳』にみられない点であることを述べた。上陽人の話(6)は前後に配される王昭君の話(5)や楊貴妃の話(7)と位相を等しく、「ツクヅクト宮ノ内ニ長メ居給ヘリケルニ」などからみて、明らかに和文資料によったと思われるのに、上陽人の話(6)だけが直接の資料未詳である。小峯は、これが屏風歌などの和歌的世界で形成された中国故事翻案話の典型であり、『俊頼髓脳』に類する別資料からこの種の話柄をまとめて、翻案・配列した可能性もあるように思うが確証はないと述べた。

以上、小峯の話を要約すれば、上陽人の話(6)が『俊頼髓脳』にないところから、その隣接した王昭君の話(5)と楊貴妃の話(7)も『俊頼髓脳』を出典としないという論である。

しかし、『俊頼髓脳』を出典とする他の共通話、すなわち第4、8、9、29、30話の話をみても、細部の表現の相異はあり、5、7話も『俊頼髓脳』から派生したことは否定しにくい。詳しい内容については後述することにしておき、まず、『今昔』巻十の『俊頼髓脳』の受容について考えてみたい。

(1) 『今昔物語集』の『俊頼髓脳』借用

『俊頼髓脳』を出典とする説話は『今昔』巻十の中で七つの話がある

ということは既に述べた。この章では、『俊頼髓脳』と『今昔』の共通話の中で出典関係をほぼ確定できる五つの話(4、8、9、29、30)における『俊頼髓脳』との受容関係を検討する。

例1-1

| 『俊頼髓脳』 | 『今昔』 十4 |
|---|--|
| <p>天の河うき木にのれるわれなれやありしにもあらず世はなりにけり</p> <p>④これは、昔、采女ないける人を、なぐひなくおぼしけり。例ならぬ事ありて、さといでたりける程に、忘れさせ給ひにけり。心地よろしくなりて、いつしかと、参りたりけるに、昔にも似ず見えければ、うらめしと思ひて、まかりいでて、たてまつりける歌なり。本文なり。漢武帝の時に、張騫といへる人を召して、「天の河の、みなかみ尋ねてないれ」と、遣しければ、浮き木にのりて、河のみなかみを尋ねゆきければ、見も知らぬ所に、行きてみれば、常に見る人にはあらぬさましたるもの、機をあまたたてて、布を織りけり。また、知らぬ翁ありて、牛をひかへて、立てり。「⑤これは天の河といふ所なり。この人々は、たなばたひこぼしといへる人々なり。さて、我は、いかなる人ぞ」と、問ひければ、「みづからは、張騫といへるひとなり。宣旨ありて、河のみなかみ、尋ねてきたるなり」と、答ふれば、</p> | <p>今昔、震旦ノ漢ノ武帝ノ代ニ張騫ト云フ人有ケリ。天皇、其ノ人ヲ召テ、「天河ノ水上尋テ参レ」ト仰セ給テ遣シケレバ、張騫、宣旨ヲ奉ハリテ、浮木ニ乗テ河ノ水上ヲ尋ネ行ケレバ、遙ニ行き行テ一ノ所ニ至レリ。其ノ所、見モ不知ズ。其二、常ニ見ル人ニハ不似ヌ様シタル者ノ、機ヲ数立テ布ヲ織ル。亦、不似ヌ翁有テ牛ヲ牽ヘテ立テリ。張騫、「⑥此ハ何ナル所ゾ」ト問ケレバ、「此ハ天河ト云フ所也」ト答フ。張騫、亦、「此ノ人々ハ何ナル人々ゾ」ト問ケレバ、「我等ハ此レ、織女・牽星トナム云フ。亦、其ハ何ナル人ゾ」ト問ケレバ、張騫、「我レヲバ張騫トナム云フ。天皇ノ仰セニ依テ、「天河水上、尋テ参レ」ト仰セヲ蒙テ来レル也」ト答フレバ、此ノ人々、「此コソハ天河ノ水上ナレ。今ハ返リネ」ト云ケルヲ聞テ、張騫返ニケリ。然テ、天皇ニ奉シテ云ク、「天河ノ水上ヲ尋テ罷テ侍リツ。一ノ所ニ至タレバ、織女ハ機ヲ立テ布ヲ織リ、牽星ハ牛ヲ</p> |

| | |
|---|---|
| <p>「これこそ、河のみなかみよ」といひて、「今は帰りね」といひければ、帰りにけり。さて、参りたりければ、「尋ね得たりや」と、問はせ給ひければ、「尋ねたりつれば、たなばたひこぼしなど、牛をひかへ、たなばたは機を織りて、これなむ、河のみなもと、と申しつれば、それより帰り参りたる」と、奏しける。</p> <p>㉔所のみなもと、ありしきもあらず、変りたりければ、そのよしを聞きて、かく詠めるなり。この歌を、みかど御覧じて、あはれとやおぼしけむ、もとのやうに、かた時もたちさらず思召しけり。その後、いくばくも経ずして、うせ給ひにけり。塚のうちに、をさめたてまつりける時に、この采女、生きながらこもりにけり。その御陵を、いけごめの御陵とて、薬師寺の西に、いくばくものがであり。まことにや、張騫帰り参らざるさきに、天文の者の参りて、七月七日に、「今日、天の河のほとりに、知らぬ星いできたり」と奏しければ、あやしびおぼしけるに、この事を聞こし召しれこそ、まことに尋ねいきたりけると、おぼしめしけり。</p> | <p>牽テ、「此ナム天河ノ水上」ト申ツレバ、其ヨリ罷り返タル也。所ノ様、常ニモ不似ザリツ」ト。然テ、張騫未ダ返リ不参ザリケル時ニ、天文ノ者、七月七日ニ参テ、天皇ニ奏シケル様、「今日、天河ノ辺ニ不知ヌ星出来タリ」ト。天皇、此レヲ聞給テ、怪ビ思ヒ給ケルニ、此ノ張騫ガ返リ来テ申ケル言ヲ聞給テゾ、「天文ノ者ノ「不知ヌ星出来タリ」ト申シシハ、張騫が行タリケルガ見エケル也ケリ。実ニ尋テ行タルケルニコソ」ト信ジ思給ケル。㉕然レバ、天河ハ天ニ有レドモ、天ニ不昇ヌ人モ此ナム見エケル。此レヲ思フニ、彼ノ張騫モ糸只者ハ非ケルニヤトゾ、世ノ人疑ケルトナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |
|---|---|

例1-1の両話は同類同話である。『俊頼髓脳』㉔のところは、天皇に見捨てられた采女の歌「天の河うき木にのれるわれなれやありしにもあらず世はなりにけり」の由来や次にくる典拠の説明であり、当然『今昔』14にはない部分である。両話の㉕の部分と同じ話筋であるが、14の㉕の方がより会話的に描写されていて、これは歌論書の叙述形式を説話集の語り型式

と変容したところを示している。『俊頼髓脳』㉔の以下は、歌を詠んだ帝が采女を寵愛し、帝の死後、采女を生きたまま塚に込めた「いけごめの御陵」のいわれが語られている。この㉔は、十4では見られない部分であり、『今昔』編者はこの部分を外した形で伝承したのである。また、『今昔』編者は㉔の部分で主題を語っている。この㉔は『今昔』体制の特徴的要素ともいえる『今昔』編者の批評もしくは世評であり、いわゆる話末語評¹⁸⁾である。話末語評こそ、『今昔』編者の『俊頼髓脳』の受容方法を最もよく示すところである。『俊頼髓脳』から素材を借用して説話を伝承しながら、編者の目指す主題を新しく作り出した。このような『今昔』編者の受容方法は基本的に他の説話の中でも一貫しているが、『俊頼髓脳』の物語部分をそのまま受け入れる場合もある。次の話はその例である。

例 2-1

| 『俊頼髓脳』 | 『今昔』十8 |
|---|--|
| <p>人知れず思へばうける言の葉もつひにあふせのたのもしきかな</p> <p>これは、惟規といふ歌よみの、女のがり、つかはしたりける歌なり。この歌の心は、もろこしに、呉㉔松孝といひける人の、宮中の内より流れいでたる、川の流れにあそびけるに、詩を作りて書きたりける木の葉の、流れて下りけるを見つけて、とりて見れば、柿のもみぢの赤かり</p> | <p>今昔、震旦ノ□ノ代ニ呉ノ㉔'招孝ト云フ人有ケリ。心ニ悟リ有ケリ。</p> <p>其ノ人若カリケル時、宮ノ内ヨリ流レ出タル河ノ辺ニ行テ遊ケルニ、木ノ葉ノ流レテ下ケルヲ見テ、取テ見ケレバ、柿ノ葉ノ赤ク紅葉タルニ詩ヲ書タリケリ。招孝、此レヲ見ルニ、女ノ手ニ有リ。</p> <p>「此レ、何ナル人ノ作テ書タルナラム」ト思フニ、誰トモ不知ネドモ、心バセ・有様思ヒ被遺テ恋キ事無限シ。終</p> |

18) 一説話の叙述内容を話題部分と末尾解説部分とにわけ、前者を物語部、素体と呼ぶのに対して、後者を話末評、話末語評、話末文などという。「此レ」「然レバ」「此レヲ(以テ)思フニ」等の句をもってはじまり、話題から引き出した教訓の提示や主題の確認、また話題についてコメントといった内容をもつ。一注6)の前掲書。

| | |
|--|---|
| <p>けるに、詩を書きたいけると、思ひけるより後に、女の手と見えければ、いかなる人、作りて書きけむと、この人ゆかしさに、思ひになりて、すべきやうも覚えざりければ、その詩の和を作りて、おなじ柿の葉に書いて、その川の、水上に流しければ、九重のうちに、流れいりにけり。その後、恋しきたびに、この柿の葉の詩を、とりいでて、泣くよりほかの事なかりけり。…（中略）…</p> <p>「この身、いたづらにして、月日を送る事を嘆きて、川のほとりにあそびき。いはのはぎまに、流れとまりたる木の葉を見れば、ひとつの詩あり。もし、ありし我が詩を見ける人の、作れると思ひて、おきたりつるなり」とぞ申しける。⑤これを聞けば、妹背のなからひ、さきの世の契りの、おろかなぬより、思ひよる事なれば、あし、よしとも、さだむべきにもあらず。</p> | <p>ニハ思ヒニ成テ可為キ様モ不思ザリケレバ、其ノ詩ノ和シテ、其レモ柿ノ葉ニ書テ、其ノ河ノ水上ニ行テ流シケレバ、宮ノ内ニ流レ入ニケリ。招孝、責テ恋シカリケル時ハ、彼ノ柿ノ葉ノ詩ヲゾ取出ツツ見テ泣ケル。…（中略）…</p> <p>女ノ云ク、「我レ、此ノ詩ヲ作りシ事ハ、我レ、天皇ノ召ニ随テ宮ノ内ニ参タリキト云ヘドモ、天皇ニ見エ奉ル事無クテ、徒ニ月日ヲ送りシ事ヲ歎テ、河ノ辺ニ遊ビシテ、一ノ詩ヲ作テ柿ノ葉ニ書テ、河ニ流シテキ。後ニ亦、其ノ河ノ辺ニ行タリシニ、磐ノ迫ニ流レ留タル木ノ葉ヲ取上テ見シカバ、一ノ詩ヲ只柿ノ葉ニ書タリキ。若シ、有シ我が詩ヲ見付タリケル人ノ造レルカト思テ、取テ置タル也」トゾ。男、此レヲ聞テゾ難忍ク思ヒケム。</p> <p>⑤然レバ、夫妻ノ契リ、前ノ世ノ宿世也ケリトゾ、互ニ思ケルトナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |
|--|---|

例2-1は『今昔』巻十が『俊頼髓脳』の叙述をほぼそのまま受け入れた例である。①「松孝」と①'「招孝」のように、登場人物の名においてずれはあるが、これは漢字の同じ音(ショウコウ)によるものとしてみられる。しかし、内容の展開上の差は殆んど見当たらない同文である。何よりも『俊頼髓脳』⑤は「人知れず思へばうける言の葉もつひにあふせのたのもしきかな」の歌の注釈として語られているが、『今昔』編者は⑤の話末語評のよ

うに、『俊頼髓脳』⑤をそのまま取って使っている。しかし、同文でありながらそれを話末語評に転用したところは『今昔』の独自のな方法として注目してよい。『今昔』編者が『俊頼髓脳』を受容しながら、歌の故事に関わって『俊頼髓脳』と同じ解釈をしたのはこの例のみである。次の例3-1は『今昔』編者の独自のな『俊頼髓脳』の受容が方法を示すものである。

例3-1

| 『俊頼髓脳』 | 『今昔』十9（第七段） |
|---|---|
| <p>垣ごしに馬を牛とはいはねども人の心のほ どをみるかな</p> <p>この歌は、四条中納言の、小式部の内侍のがりつかはしける歌なり。その心は、孔子の、弟子どもを具して、道をおはしけるに、垣より、馬、かしらをさしいでてありけるを見て、「<u>㉑牛よ</u>」とのたまふければ、弟子ども、<u>㉒あやしと思ひて</u>、あるやうあらむと思ひて、道すがら、心を見むと思ひけるに、顔回といひける第一の弟子の、一里を行きて、心得たりけるやう、「日よみの午といへる文字の、かしらさしいだして書きたるをば、牛といふ文字になれば、人の心を見むとて、のたまふなりけり」と思ひて、問ひ申しければ、「しか、さなり」とぞ、答へ給ひける。つぎつぎのでしどもは、次第に、十六町を行きつつぞ、心得ける。㉓されば、それならねども、人の心をば見ると、詠まれ</p> | <p>只、孔子、諸ノ弟子ヲ引具シテ道ヲ行き給ケルニ、道辺ナル垣ヨリ馬ノ頭ヲ指出テ有ケルヲ見給テ、孔子、「<u>㉑此ニ牛ノ頭ヲ指出タル</u>」ト宣ヒケレバ、弟子共、「<u>㉒正シク馬ヲ牛ト宣フ、怪キ事也</u>」ト思ヒケレドモ、様有アムト思テ、終道ヲ各ノ心得ムト思ヒケルニ、顔回ト云フ第一御弟子、一里ヲ行テ心得ケル様、「日読ノ午ト云フ字ヲ、頭ヲ指出シテ書タルヲ、牛ト云フ字ニテ有レバ、此ノ馬ノ頭ヲ指出タレバ、人ノ心ヲ試ムトテ「牛」ト宣ケル也ケリ」ト思テ、師ニ問ヒ申シケレバ、「然カ也」トゾ答ヘ給ケル。次次ノ御弟子共、次第ニ十六町ヲ行ゾ心得ケル。㉓然レバ、人ノ心ノ疾キ遅キ顕也。孔子ハ此ノ智リ広ク在シケレバ、世ノ人皆、首ヲ低ケ貴ビ敬ケリトナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |

| | |
|-----|--|
| たり。 | |
|-----|--|

例3-1の『今昔』の部分は十9の説話の末尾に置かれたエピソードである。『今昔』編者はこの例において、『俊頼髓脳』の物語と『今昔』の説話を1対1形式で配置しただけではなく、『俊頼髓脳』の一つの物語を『今昔』の一つの説話の中で、幾つかの逸話の中の一つの逸話として位置させる受容方法を取っている。この受容方法により、『今昔』は一つの説話が出典(もしくは典拠)を異にする部分的類話を持つものとなった。この方法は『俊頼髓脳』の受容だけに限って行われたのではなく、『今昔』の編者が参考にした先代説話集の全般において行われた。『今昔』巻十は震旦部の世俗説話であり、特に「国史」というタイトルが付いているゆえ、一つの話の中にも多くの内容を取り入れるためにこのような方法が頻繁に行われた。この方法に関しては後述することにし、まず例3-1の説話の受容関係を考えてみたい。

両話の①、②を比較してみると両方は同じ内容である。『俊頼髓脳』の①「牛よ」、②「あやしく思ひて」が『今昔』では①「此ニ牛ノ頭ヲ指出タル」、②「正シク馬ヲ牛ト宣フ、怪キ事也」になっているように、十9の方がより詳しく説明的であり、『今昔』の説話集的な特徴をよく表している。しかし、両話は同文的内容でありながら、その主題は③のように全く異っている。『俊頼髓脳』③は、歌「垣ごしに馬を牛とはいはねども人の心のほどをみるかな」の注釈であり、その主題は「それならねども」と述べている。これは『今昔』十1「秦始皇、在感楊宮政世語」の「超高の謀反」(後述する例25-4)の話のように、「人心をば見ると」、すなわち、「人の心を試みるのだ」と語っている。それに比べ、『今昔』編者が主題として伝えて

いるのは、㉔の話末語評のように、「悟りを得ることにおいて早い人と遅い人との差異は顕著である」といいながら、孔子に対する世評を付ける形で『俊頼髓脳』を受容している。

上記三つの例において『今昔』編者の姿勢は『俊頼髓脳』の歌に関わる物語部分の内容を取って、物語から外れない範囲で話末語評を示す程度であったが、次の例では物語の内容に対する『今昔』編者の評がより積極的に表わされている。

例4-1

| 『俊頼髓脳』 | 『今昔』十29 |
|--|--|
| <p>血のなみだ落ちてぞたぎつ白川は君が世までの名にこそありけれ</p> <p><u>血の涙</u>といへる事は、おこりある事なり。もろこしに卞和といひける、たまつくりのありけるが、玉をつくりて、みかどにたてまつりたりけるを、みかど、ことたまつりを召して、みせさせ給ひけるに、「これは、光もなく、不用の玉なり」と申しければ、「いかで、かかる不用の物をば、たてまつりけるぞ」とて、左の手を、きらせ給ひけり。さて、また代変りにけり。また、新しくたたせ給ふ帝王に、懲りずまに、玉をつくりて、たてまつりたりけるを、はじめのやうに、玉つくりを召して、問はせ給ひければ、これまた、「不用の玉なり」と申しければ、また、右の手を切られにけり。泣きかなしぶ事、かぎりなし。㉔涙つ</p> | <p>今昔、震旦ノ□ノ代ニ一人ノ玉ヲ造ル者有ケリ。名ヲ卞和ト云ケリ。玉ヲ造テ、天皇ニ奉タリケルヲ、天皇、他ノ玉造ヲ召テ、此ノ玉ヲ見セ給ケレナ、其ノ玉造、此ノ玉ヲ見テ、「此ノ玉ハ光モ無ク不用ノ物也」ト申ケレバ、天皇、大キニ嗔リ給テ、「何デ、此ル不用ノ物ヲバ奉テ、公ヲバ欺ゾ」トテ、其ノ本ノ玉造ヲ召テ、左ノ手ヲ被斬ニケリ。其ノ後、代替テ、他ノ天皇、位ニ即給テ、亦、前ノ玉造ヲ召テ玉ヲ造セ給ケレバ、造テ奉タリケルヲ、前ノ天皇ノ如ク他ノ玉造ヲ召テ見セ給ケルニ、其ノ度モ亦、前ノ如ク、「此ノ玉、光モ無ク不用ノ物也」ト申ケレバ、亦前ノ如ク、天皇嗔リ給テ、此ノ度ハ右ノ手ヲ被斬ニケレバ、卞和泣キ悲ム事無限シ。而ル間、亦代替テ、他ノ天皇、位ニ即給ヒ</p> |

| | |
|---|--|
| <p>きて、<u>血の涙をながして、夜昼泣きけり</u>。また、世の中変りて、また、新しく、みかどいでおはしましたりけるに、なほ、こりずまに、<u>⑥さきざきわろしとて、返したまはりたりける玉を、たてまつりたりければ、</u>みかど、玉つくりを召して、やうあらむとて、みかがせ給ひたりければ、えもいはず光をはなちて、照らさぬ所なかりけり。さて、二代までは、くれなるの涙を流して泣きける。三代といへるたび、賞をかうぶりて、喜びける。◎<u>帝王の愚かにおはしますなるために、申すなる事なり。</u>みかどの御前などにては、荒涼しては詠むまじき事と、承りしかど、承暦のたびの歌合にも、恋の歌に候ひしは、いかなる事にか。</p> | <p>ヌ。<u>⑥</u>卞和、尚不懲ズ、玉ヲ造テ天皇ニ奉タリケレバ、亦、他ノ玉造ヲ召テ見セ給テ、「尚、此ハ様有ラム」ト思シ食テ瑩セ給ケレバ、世ニ並ビ無ク艷光ヲ放テ、不照ヌ所無ク照シケレバ、天皇喜ビ給テ、卞和ニ賞ヲ給テケリ。然レバ、卞和、前ノ二代ニハ涙ヲ流シテ泣キ悲ビケルニ、三代ト云フニ、賞ヲ蒙テゾ喜ビケル。◎<u>此ニ依テ、世ノ人、前ノ二代ノ天皇ヲバ皆、誇リ申ケリ。今ノ天皇ヲバ「賢ク御ケリ」ト讃メ申ケリ。</u>此レ、二代ノ天皇ノ愚ニ御ケル也。<u>「尚、様有ラム」ト思廻シ可給キニ、吝ク手ヲ被斬ルガ弊キ也。</u>亦、卞和モ不懲ズ玉ヲ奉ケル、極テ吝シ。「前ノ二代ニハ既ニ左右ノ手ヲ被斬レヌ。此ノ度ビ、若シ前ノ二度ノ如ク有マシカバ、此ノ度ハ頸ヲ被斬ナマシ」ト世ノ人疑ケレドモ、卞和ガ誣テ奉ルモ思フ様コソハ有ケメ。<u>④</u>然レバ、万ヅノ事ハ、尚、此ク強ク可思キ也トゾ、人云ケルトナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |
|---|--|

『俊頼髓脳』の該当説話は、和歌「血のなみだ落ちてぞたぎつ白川は君が世までの名にこそありけれ」における「血の涙」に対する起源譚である。『俊頼髓脳』には歌を含めて「血の涙」が3回も記されているが、『今昔』では④「涙つきて、血の涙をながして、夜昼泣きけり」のような和歌にまつわる要素「血の涙」がすべて消されている。また、玉を献上するこ

とについて『今昔』では⑥のように三度も玉を造っているのに対し、『俊頼髓脳』では「さきざきわろしとて、返したまはりたりける玉を、たてまつりたりければ」と、三度目は前回、前々回に返された玉を献上する。内容上、両手が斬られたため、もう玉が造られないはずで、『俊頼髓脳』の展開が自然にみえる。しかし、『今昔』編者は卞和に強直な人物性格を与えるために、三度も玉を造る設定をしたと思われる。『今昔』編者が思うのに、両手が斬られても繰り返して玉を供える卞和にはこの方が似合うと考えたのではないかと思われる。『俊頼髓脳』③では、ただ先代王の批判が軸になっているが、『今昔』③では、先二代の王を非難しながら、三代目の王について「賢ク御ケリ」と讃嘆している。さらに、卞和の行動について「卞和モ不懲ズ玉ヲ奉ケル、極テ吝シ」と非難しつつ、「前ノ二代ニハ既ニ左右ノ手ヲ被斬レヌ。此ノ度ビ、若シ前ノ二度ノ如ク有マシカバ、此ノ度ハ頸ヲ被斬ナマシ」と世人に託した形で疑問まで示し、続いて「卞和ガ誣テ奉ルモ思フ様コソハ有ケメ」という答えまで示している。そして、④の話末語評として「このように意志を強くすべきである」と窮極的な教訓を提示している。

例5-1

| 『俊頼髓脳』 | 『今昔』十30 |
|---|--|
| 秋風に初雁がねぞきこゆるたが玉づきをかけてきたらむ この歌は、漢武帝と申しける帝の御時に、胡塞といへる所に、蘇武といへる人を、遣したりけるが、え帰らで、年来ありけるを、①衛律ろいひける人の、たまゆ | 今昔、漢ノ武帝ノ代ニ、蘇武ト云フ人有ケリ。天皇、□依テ、此ノ人ヲ胡塞ト云フ所ニ遣タリケルニ、久ク返リ不得ズシテ、年来、其ノ所ニ有ケルガ程ニ、亦、①衛律ト云フ人、其ノ所ニ行タリケルニ、衛律、行き着クマニ、其ノ所ノ人ニ先ヅ、「蘇武ハ有ヤ否ヤ」ト問ケ |

| | |
|--|--|
| <p>きて、「蘇武はありや」と問ひければ、あるを隠して、「その人は、年久しくなりぬ」といひければ、そらごとを隠していふぞと、心を得て、「㊦蘇武は、死なざるなり。この秋、雁のあしに、文を書きて、たてまつれり。その文を御覧じて、蘇武いまにあり、とはしろしめしたり」と、はかり事をなしていひければ、しか、さるにては、やくなしと思ひて、「㊧まことにはあり」といひて、あはせけるといへり。それによそへて、かの雁の歌は詠むなり。</p> | <p>レバ、其ノ所ノ人、蘇武ハ有ケルヲ隠サムガ為ニ、謀ヲ成シテ、「蘇武、早ウ失テ年久ク成ヌ」ト答ケルヲ、衛律、「隠シテ虚言ヲ云フゾ」ト心得テ、「㊦蘇武、不死ズシテ未ダ有ル也。此ノ秋、雁ノ足ニ文ヲ結付テ、蘇武ガ書ヲ天皇ノ奉ケレバ、雁、王城ニ飛ビ来テ、其ノ書ヲ天皇ニ奉タリキ。天皇、其ノ書ヲ御覧ジテ、蘇武于今有リト云フ事ヲ思シ食タリ。此レ、謀也」ト云ケレバ、其ノ所ノ人、謀ニテ有ケレバ、「隠シテ益無シ」ト思テ、「㊧実ニハ未ダ不死ズシテ有リ」ト云テ、蘇武ヲ衛律ニ会セタリケリ。㊨雁ノ足ニ文結付タル事ハ、衛律ガ謀ニ言ナレドモ、此レニ依テ蘇武出来レバ、世ノ人、此レヲ聞テ、衛律ヲゾ讚メ感ジケル。㊩然レバ、虚言ナレドモ、事ニ随テ可云キ也ケリ。衛律ガ謀ノ言ハ賢カリケリナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |
|--|--|

この例における『俊頼髓脳』の故事は「雁」と「手紙」にまつわる歌「秋風に初雁がねぞきこゆるたが玉づさをかけてきたらむ」の由来譚として引かれた。両話も漢籍の内容とは異なる部分を共通としている。

漢籍と異なる部分を共通としているところをみると、まず、両話は蘇武よりも㊦「衛律」の方が賢いと語っている。両話㊦「衛律の騙りによって蘇武の手紙を語る」のは、もと雁書の故事で名高い話であるが、この「衛律の騙り」の話は『俊頼髓脳』と『今昔』以外には見当たらない。すなわち、優

れた機智で「蘇武」を助ける「衛律」の名が見えるのは両話のみである。『漢書』蘇武伝に拠れば¹⁹⁾、「蘇武とともに捕えられた常恵のひそかに漢使の教えた謀智であり、天子が上林で雁を射たところ、肢に帛書がついており、それによって蘇武が匈奴の地の某沢にあるを知った、と漢使に言わしめた」とする。

しかし、このように共通する両者の説話は、内容的に完全に同じではない。『俊頼髓脳』末尾㉔「まことにはありといひて、あはせけるといへり」が『今昔』の㉔「実ニハ未ダ不死ズシテ有り」になっている。『今昔』編者は、この物語においても、世評に託して㉔のように『今昔』編者の解釈、批評が附加しつつ、㉔のように武将の機智の意味合いを語っている。

『今昔』編者は衛律の騙りに焦点を合わせていて、十30の表題になっている蘇武はあまり機能をしてはいない。

ここまで『俊頼髓脳』の出典関係が明確に認められた五つの話について比較分析してみた。すべてが同文的同話であるものの、『今昔』編者の独特な受容態度が確認できた。

(2) 『今昔』の『俊頼髓脳』変容

『俊頼髓脳』を出典とする『今昔』巻十の七つの話の内、五つの話については前章において受容の観点から考えてみた。この章では小峯が直接関係を断定しにくいと指摘した二つの話、すなわち王昭君の話(5)と楊貴妃の話(7)の受容について、変容という観点から考えてみたい。本稿において

19) 注13)前掲書の158頁の注

変容という言葉は、話の同文的な受容を越えて、別の要素を取り入れたり元の内容を変形したりする受け方を意味するものとして用いる。

まず、小峯が『俊頼髓脳』にない部分が入っていたと指摘した王昭君の話(5)から考えてみたい。

例6-1

| 『俊頼髓脳』 | 『今昔』十5 |
|--|--|
| <p>みるたびにかがみのかげのつらきかなかからざりせばかからましやはなげきこし道の露にもまさりけりなれにしさとをこふる涙は</p> | <p>漢前帝后王照君、行胡国語今昔、震旦ノ漢ノ前帝ノ代ニ、天皇、大臣・公卿ノ娘ノ、形チ美麗ニ有様微妙キヲ撰ビ召ツツ見給テ、<u>㊤宮ノ内ニ皆居ヘテ、其ノ員四五百人ト有ケレバ、</u></p> |
| <p>この歌は、懐円と赤染とが、王照君を詠める歌なり。もろこしには、みかどの、人のむすめ召しつつ御覧じて、<u>㊤宮のうちに、すゑなめさせ給ひて、四五百人とみなみて、いたづらにあれど、ここには、あまりの多くつもりにければ、御覧ずる事もなくてぞ候ひける。</u>それに、えびすのやうなるものの、外の国より、都に参りたる事のありけるに、いかがすべきと、人々に、さだめさせ給ひけるに、「この宮のうちに、いたづらに多く侍る人の、いとしもなからむを、一人給ふべきなり。それにまさる心ざしはあらじ」と、さだめ申しければ、さもと思ひ召して、みづから御覧じて、その人を、さだめさせ給ふべけれど、人々の多さに、思し召しねづらひて、絵師を召して、「この人々のかた、</p> | <p>後ニハ余リ多ク成テ、必ズ見給フ事モ無クテゾ有ケル。</p> <p>而ル間、胡国ノ者共、都ニ参タル事有ケリ。此レハ夷ノ様ナル者共也ケリ。此ニ依テ、天皇ヨリ始メ大臣・百官、皆、此ノ事ヲ繚テ議スルニ、思ヒ得タル事無シ。但シ、一人ノ賢キ大臣有テ、此ノ事ヲ思ヒ得テ申ケル様、「此ノ胡国ノ者共ノ来レル、国ノ為ニ極テ不宣ヌ事也。然レバ、構ヘテ、此等ヲ本国ヘ返シ遣ム事ハ、此ノ宮ノ内ニ徒ニ多ク有ル女ノ、形チ劣ナラムヲ一人、彼ノ胡国ノ者ニ可給キ也。然ラバ、定メテ喜ムデ返ナム。更ニ此レニ過タル事不有ジ」ト。天皇、此ノ事ヲ聞給テ、「然モ」ト思給ケレバ、自ラ此等ヲ見テ、其ノ人ヲト定メ可給ケレドモ、此ノ女人共ノ多カレ</p> |

| | |
|---|---|
| <p>絵に画きうつして参れ」と、仰せられければ、次第に画きけるに、この人々、えびすの具にならむ事を嘆き思ひて、われもわれもと思つて、おのおの、こがねをとらせ、それならぬものをもとらせければ、いとしもなき容姿をも、よく画きなして、持てきたりけるに、<u>㊦王照君といふ人の、容姿のまことにすぐれて、めでたかりけるをたのみて、絵師に、物をも、心ざさずして、うちまかせて画かせければ、本のかたちのやうには画かで、いとあやしげに、画きて持て参りければ、この人を給ふべきにさだめられぬ。その程になりて、召して御覧じけるに、まことに玉のひかりて、えもいはざりければ、みかど、おどろき思し召して、これを、えびすに給ばむ事を、思し召しわづらひて、嘆かせ給ひて、日頃ふる程に、えびす、その人をぞ賜はるべきと聞きて、参りにければ、あらためさだめらるる事をなくて、つひに賜ひにねれば、馬にのせて、はるかにゐていにけり。王照君、嘆き悲しむ事かぎりなし。みかど、恋しさに、思し召しわづらひて、<u>㊧かの王照君が居たりける所を、御覧じければ、春は柳、風になびき、うぐひす、つれづれにて、秋は、木の葉につもりて、軒のしのぶ、隙なくて、いとど、もの哀なる事かぎりなし。この心を詠める歌なり。かかたざりせば、と詠めるは、わろからましかばたのまぎらまし、と詠めるなり。ふるさとを恋ふる涙は、道の露</u></u></p> | <p>バ、思ヒ煩ヒ給フニ、思ヒ得給フ様、「数ノ絵師ヲ召テ、此ノ女人共ヲ見セテ、其ノ形ヲ絵ニ令書メテ、其レヲ見テ、劣ナラムヲ胡国ノ者ニ与ヘム」ト思ヒ得給テ、絵師共ヲ召テ、彼ノ女人共ヲ見セテ、「其ノ形共ヲ絵ニ書テ持参レ」ト仰セ給ケレバ、絵師共此レヲ書ケルニ、此ノ女人共、夷ノ具ト成テ、遥ニ不知ヌ国□行ナムズル事ヲ歎キ悲テ、各我モ我モト絵師ニ、或ハ金銀ヲ与ヘ、或ハ余ノ諸ノ財ヲ施シケレバ、絵師、其レニ耽テ、弊キ形ヲモ吉ク書成シテ持参タリケレバ、<u>㊨其ノ中ニ王照君ト云フ女人有リ。形チ美麗ナル事、余ノ女ニ勝タリケレバ、王照君ハ、我が形ノ美ナルヲ憑テ、絵師ニ財ヲ不与ザリケレバ、本ノ形ニ如クニモ不書ズシテ、糸ト賤氣ニ書テ持テ参リケレバ、「此ノ人ヲ可給ベシ」ト被定ニケリ。天皇、怪ビ思給テ、召テ此レヲ見給フニ、王照君、光ヲ放ツガ如クニ実ニ微妙シ。此レハ玉ノ如ク也。余ノ女人ハ皆土ノ如ク也ケレバ、天皇、驚キ給テ、此レヲ夷ニ給ハム事ヲ歎キ給ケル程ニ、日来ヲ経ケルニ、夷ハ、「王照君ヲナム可給キ」ト自然ヲ聞テ、宮ニ参テ其ノ由ヲ申ケレバ、亦、改メ被定ル事無クテ、遂ニ王照君ヲ胡国ノ者ニ給テケレバ、王照君ヲ馬ニ乗セテ胡国ヘ将行ニケリ。王照君、泣キ悲ムト云ヘドモ、更ニ甲斐無カリケリ。亦、天皇モ王照君ヲ</u></p> |
|---|---|

| | |
|---|--|
| <p>にまさるなど詠むも、王昭君が思ふらむ心のうち、おしはかりて詠むなり。かの、えびすのやうなる物と申すは、胡の国のみかどの、「わが国にはよき女のなきに、容姿よからむ人賜はらむ」と申しけるとも、申したる文ありとぞ。</p> | <p>恋ヒ悲ビ給テ、思ヒノ余リニ、㊦彼王昭君ガ居タリケリ所ニ行テ見給ケレバ、春ハ柳、風ニ靡キ、鶯徒徒ニ鳴キ、秋ハ木ノ葉、庭ニ積リテ、檐ノ□隙無クテ物哀ナル事、云ハム方無カリケレバ、弥ヨ恋ヒ悲ビ給ケリ。</p> <p>㊧彼ノ胡国ノ人ハ王昭君ヲ給ハリテ、喜ムデ、琵琶ヲ弾キ諸ノ楽ヲ調べテゾ将行ケル。王昭君、泣キ悲ビ乍ラ、此レヲ聞テゾ少シ嘸ム心地シケル。既ニ本国ニ将至ニケレバ、后トシテ傳ケル事無限シ。然レドモ、王昭君ノ心ハ更ニ不遊モヤ有ケム。㊨此レ、形ヲ憑テ絵師ニ財ヲ不与ザルガ故也トゾ、其ノ時ノ人謗ケルトナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |
|---|--|

本来、王昭君の記事の初出は『漢書』巻九「元帝本気」であり、漢の竟寧元年に匈奴王の単于が来朝し、元帝が後宮の王嫱を与えたことを簡単に記している。

日本の物語では『宇津保物語』に「めくたち」という曲にまつわる話として翻案されたものが早い例であり、「画工曲筆」の話型をもとに独自の物語に仕立てられているが、胡国に嫁する后を選ぶために絵を描かせていたという点はこの話と共通している。

さらに、平安中期から王昭君は『後拾遺』の赤染衛門歌や懐円歌をはじめ、歌題として一般化する。『俊頼髓脳』もこの歌を踏まえているし、歌の由来譚の導入部にも二人の名前が登場する。

さて、『今昔』十5と『俊頼髓脳』を順番に比較して見ると、まず、㊦と

⑥は両話が殆んど同じ形をとっていることがみられる。特に、両話の③の「容姿のまことにすぐれて、めでたかりけるをたのみて、絵師に、物をも、心ざさずして」や「我が形ノ美ナルヲ憑テ、絵師ニ財ヲ不与ザリケレバ」は同文であるが、『今昔』編者はこの内容を話末評語⑤「此レ、形ヲ憑テ絵師ニ財ヲ不与ザルガ故也トゾ、其ノ時ノ人謗ケルトナム語り伝ヘタルトヤ」のような批判につないでいく。

(1)章の例4-1で『今昔』編者は和歌的要素を除いて『俊頼髓脳』を受容したが、例6-1の十5には和歌的文脈を残している。両話③は春秋の風景を描写しながら王の心境を語っているが、『俊頼髓脳』の場合③に続く部分は、歌「みるたびにかがみのかげのつらきかなかからざりせばかからましやは」の説明の役割を担っている。また、この後の歌「なげきこし道の露にもまさりけりなれにしさとをこぶる涙は」に対する説明として王昭君の心境を説明している。十5の場合は③のあと、小峯が直接関係を否定する理由として挙げた『俊頼髓脳』にみられない部分が語られている。

『今昔』編者が『俊頼髓脳』の和歌部を外した説話部のみを取って、『俊頼髓脳』を伝承しているということは、もう自明である。しかし、例6-1の場合『今昔』編者が外した和歌の部分は、『今昔』④のように残っている。すなわち、『俊頼髓脳』の和歌や和歌が詠まれた話尾を除き、その代わりに、④のように変容したのであろう。それが第5話と『俊頼髓脳』との直接関係を否定する理由にはならない。この相異は『今昔』編者の創作的意図として認めたほうが正しいだろう。王昭君の話は『今昔』の時代よりも前から有名な話であった。

さて、同時期の他説話集の中で『今昔』や『俊頼髓脳』と重なる話は

ないだろうか。『今昔』とほぼ同じ時期の中国説話の翻案物語集『唐物語』（上限1151、下限1204）の王昭君(25話)の話とも比較してみよう。

例6-2 『唐物語』 25²⁰⁾

むかし漢の元帝と申御かどおはしましけり。三千人の女御きさきのなかに王昭君ときこゆるひとなん、はなやかなる事はだれにもすぐれ給へりけるを、「㉑この人みかどにまちかくむつれつかうまつらば、我らさだめて物のかずならじ」と、あまたの御ころにいやましくおぼしけり。この時にえびすの王なりけるものまいりて申さく、「三千人までさぶらひあひ給へる女御きさき、いづれにてもひとりたまはらん」と申に、うへみづから御覧じつくさん事もわづらひ有ければ、そのかたちをゑにかきて見給に、㉒人のをしへにやありけん、その王昭君のかたちをなんみにくきさまになむうつしたりければ、えびすの王給てよろこびひらけつつ、我くにへぐしてかへるに、ふるさとをこふる涙はみちの露にもまさり、なれし人々にたちわかれぬるなげきは、しげみ山の行すゑはるかなり。かかるままには、ただねをのみなけどもなにのかひかはあるべき。

㉓うき世ぞとかつはしるしるはかなくも かがみのかげをたのみけるかな
あはれをしらずなさけふかからぬものなれども、らうたきすがたにめでて、かしづきうやまふ事その国のいとなみにもすぎたり。かかれどもふりにしみやこをたちわかれにしより、いまにいたるまで、うれへのなみだかはくまなし。㉔この人はかがみのかげのくもりなきをのみたのみて、ひとの心のごれるをしらず。

前の二話に比べ最も特徴的な点は、絵師に賄賂を贈るという記述がなく、㉑「あまたの御ころにいやましくおぼしけり」や㉒「人のをしへにやありけん」と周りの宮女の嫉妬が曲筆の原因になっていることである。また、この設定は説話末尾の㉔「この人はかがみのかげのくもりなきをのみたのみて、ひとの心のごれるをしらず」に結び付いている。例6-2にも『今昔』 15の

20) 小林保治『全訳注 唐物語』「王昭君、絵姿を醜句写され、胡の王に嫁ぐ語」（講談社学術文庫、2003年）

「琵琶の話」は見えないが、『俊頼髓脳』のような歌㉔が載っている。これは王照君の詠んでいる歌として、『今昔』十5の話末語評が連想される。

次の例7-1も小峯が『俊頼髓脳』との出典の関係を断定しにくいと指摘した説話である。

例7-1

| 『今昔』十7 | 白氏文集 ²¹⁾ | 俊頼髓脳 |
|-------------------------------------|---|---|
| (1)本ヨリ色ヲ好ミ、女ヲ愛シ給フ心有ケリ | 漢皇色を重んじて傾国を思ひ ²²⁾ | もとより色をなむ好み給ひける |
| (2)后ヲバ〔〕后宮ト云ヒ、女御ヲバ武淑妃ト云ゾケル | | 后をば、源憲皇后といひ、女御をば、武淑妃となむ聞えける |
| (3)天皇自ラ宮ヲ出テ遊ビ行テ、所々ヲ見給ケルニ | | |
| (4)此ノ女御ノ御兄ニ楊国忠ト云ケル人ニナム、世ノ政ヲバ任セ給タリケリ | | この女御の御兄の、楊国忠といへる人になむ、その政治をばまかせて、させて給ひける |
| (5)世ニ有ラム人ハ男子ヲバ不儲ズシテ、女子ヲ可儲キ也ケリ | 遂に天下の父母の心して男を生むを重んぜず女を生むを重んぜしむ ²³⁾ 。 | 世にあらむ人は、をのこごをばまうけずして、女子をなむまうべき |
| (6)其ノ時ノ大臣ニテ、安禄山ト云フ人有ケリ。心賢ク思量有ケル人ニテ | | 安禄山といふ人、いかでみかどをあやぶめたてまつりて |
| (7)安禄山、蜜ニ軍ヲ調ヘテ王宮ニ押入ル時ニ、天皇恐怖レ給テ | 漁陽の鼙鼓地を動かし来り驚破す 霓裳羽衣の曲 ²⁴⁾ | 漁陽といへる所、あそばせ給ひける程に、この安禄山、いくさを起し |

| | | |
|--|--|--|
| <p>(8)陳玄礼、銚ヲ腰ニ差テ、御輿ノ前ニ跪テ、天皇ヲ礼シテ申シテ申サク、「君、楊貴妃ヲ哀ビ給フニ依テ、世ノ政ヲ不知給ハズ。…願クハ、其ノ楊貴妃ヲ給ハリテ、天下ノ瞋ヲ可透□」ト。</p> | | <p>(この安祿山、いくさを起し)ほこをこしにさして、御輿のさきに伏して、申しけるやう、「ねがはくは、その楊貴妃を賜ひて、天下のいかりをなごめむ」と</p> |
| <p>(9)而ル間、楊貴妃逃テ堂ノ内ニ入テ、仏ノ光ニ立副テ隠ルト云ドモ、陳玄礼、此レヲ見付テ捕テ、練絹ヲ以テ楊貴妃ノ頸ヲ結テ殺シツ</p> | <p>六軍発せず奈何ともする無し宛転たる蛾眉馬前に史す²⁵⁾花鈿地に委して人の収むる無し 翠翹 金雀 玉搔頭²⁶⁾</p> | <p>みかど、惜しみ給はずして、この女御を賜ひてけり。安祿山、賜はりて、みかどの御前にて、殺してけり</p> |
| <p>(10)然テ、安祿山ハ、天皇ヲ追出シテ、王宮ニ在テ世ヲ政ツ間、即チ死ニケリ。然レバ、玄宗、御子ニ位ヲ譲テ、我レハ大政天皇ニテ御ケルニ、</p> | <p>天旋り地転じて龍馭を廻し此に到りて躊躇して去ること能はず 馬嵬坡下 泥土の中玉顔を見ず空しく死せし処君臣相顧て尽く衣を霑し東のかた都門を望み馬に信せて帰る²⁷⁾</p> | <p>かくて、都に帰り給ひて、位をば、東宮にゆづり給ひにけり。</p> |
| <p>(11)然テ、方士ニ給テ、「此レヲ持テ天皇ニ可奉シ。昔ノ事ハ此レヲ見テ思シ出ヨ」ト申」ト。</p> | <p>鈿合金釵寄せ將ち去かしむ 釵は一股を留め合は一扇釵は黄金を撃き合は鈿を分つ²⁸⁾</p> | <p>玉のかんざしをなむ、つみ折りて賜はせける。「これを持ちて、みかどにたてまつれ。昔の事、これにて思しいでよ」と申し給ひける。</p> |
| <p>(12)但シ、安祿山ノ殺スモ、世ヲ直サムガ為ナレバ、天皇モ否不惜給ザリケルヤ。昔ノ人ハ、天皇モ大</p> | | |

| | | |
|------------------------------|--|--|
| 臣モ道理を知テ此ゾ有ケ ルトナム語り伝ヘタルトヤ。 | | |
|------------------------------|--|--|

例7-1の楊貴妃の話は、『今昔』に載せられている説話自体が長いので、議論の対象となっている内容を中心に検討してみたい。

- (1)例の三書がほぼ同じ内容で王の色好きについて語っている。
- (2)『白氏文集』にはない内容で、『今昔』と『俊頼髓脳』は共通しているが、『今昔』では武淑妃の名は出ているが、源憲皇后の名は欠字になっている。
- (3)『今昔』だけの叙述で、『今昔』編者は政治に疎かにする王を描写することで、後の乱を正当化する装置として記している。
- (4)原拠『白氏文集』にはない「楊国忠」の名前が『今昔』と『俊頼髓脳』に共通して見られる。
- (5)共通している
- (6)『今昔』と『俊頼髓脳』には「安禄山」の名前が見えるが、『白氏文集』の中では「安禄山」の名前は出てない。そして、『今昔』の「安禄山」の人物平価は注目すべきである。「心賢ク思量有ケル人ニテ」も(3)のように反乱の正当化のための叙述として見られる。

21) 内田泉之助 『白氏文集』中国古典新書（明德出版社、1997年、初出1973）

22) 漢皇重色思傾国。

23) 遂令天下父母心 不重生男重生女。

24) 漁陽鞞鼓動地来 驚破霓裳羽衣曲。

25) 六軍不發無奈何 宛轉蛾眉馬前死。

26) 花鈿委地無人收 翠翹金雀玉搔頭。

27) 天旋地轉迴龍馭 到此躊躇不能去 馬嵬坡下泥土中 不見玉顏空死處 君臣相顧尽沾衣 東望都門信馬歸。

28) 鈿合金釵寄將去 釵留一股合一扇 釵擘黃金合分鈿。

(7)『白氏文集』と『俊頼髓脳』に共通する「漁陽」という地名が『今昔』には見えない。

(8)楊貴妃を殺すことを申す人として『今昔』には陳玄礼という人物を登場するが、『白氏文集』と『俊頼髓脳』にはそのような人物が登場しない。

(9)楊貴妃の死についての場面の説明であるが、『白氏文集』は象徴的な叙述だけで処理しており、『俊頼髓脳』もただ「殺された」で終わらせている。これらに比べて『今昔』はかなり詳しく述べている。

(10)「安祿山」の死を語るのは『今昔』だけで、上皇になったことは『白氏文集』にはない。

(11)『白氏文集』と『俊頼髓脳』にはある「かんざし」のことが『今昔』には明示されていない。

(12)語り手の意見を反映しているところで『今昔』のみの特色がうかがわれる。

上に見るごとく、『今昔』の話は『俊頼髓脳』は共通しているところも、そうではないところもあるが、『白氏文集』より『俊頼髓脳』の方に近い『今昔』十7も前例の王昭君の話のように有名な話である。そこで『今昔』編者はこの説話を組み立てるとき、すでに多くの資料に接しており、そのような経験が説話の中に溶け入れられたと思われる。

以上のように、『俊頼髓脳』を出典とする『今昔』の該当説話について比較してみた。『今昔』編者が『俊頼髓脳』を受け入れたとしても、編纂に作家的創作力や知識が働いたことは自明である。他に小峯が言及してな

い説話にも、『俊頼髓脳』にない部分が入れられたり、『今昔』編者の意見が加筆されたりしている。この点は卷十の話の全般にわたって見られる。したがって、小峯が5話と7話が『俊頼髓脳』との直接関係を否定したのは正しくないと思われる。

2. 『今昔物語集』 卷十における『注好選』

漢文体の『注好選』を、仮名文脈の『俊頼髓脳』と同じく『今昔』 卷十の有力な出典として断定するのは、かなり微妙な問題であるが、『今昔』 卷十と『注好選』²⁹⁾の共通話が見られる限り、『注好選』の影響関係は検討すべきである。その共通話は、関連性の薄いものを除いても九話(9、16、17、19、20、21、27、39、40)に至り、部分的に類似する話まで入れると十三話に達する。

両書の同類話を見ると、『注好選』は『今昔』 卷十に比べて、漢文体であるゆえ、文章が簡略で、説話自体が短い。さらに、登場人物の紹介が省略されたり、『今昔』の一つの話に部分的に差入れた形で存在したりするが、漢籍の素材の取り方は『今昔』と共通している。このことと関連して、もう一つ注目されるのは、漢籍『蒙求』との関係であるが、「養由号猿」(十・16)「李広成蹊」(17)「李札挂劍」(20)「王饨繡被」(22)「賈誼忌鵬」(24)「高鳳漂麦」(25)など、これらの例以外にも数多い話が『今昔』と共通している。『注好選』と共通する『今昔』の十三話の内、『蒙求』と共通している説話は五話(16、17、20、25、30)である。この関係に注目すれば、『注好選』が『今昔』 卷十に対して、かなり重要な役割を果たしたことが明確になると考える。この章では『注好選』と『今昔』の関係に注目して、その変容の方法を考えてみたい。また、漢籍の媒介体としての『注好選』、特に『注好選』と『蒙求』との関係に重点をおいて考察する。

29) 本文の引用は、馬淵和夫(外)『三宝絵 注好選』新日本古典文学体系31(岩波書店、1997)による。

(1)漢籍の媒介としての『注好選』

『注好選』についてその概略を述べると次のようである。故事・説話集として3巻の構成で撰者は未詳である。また、成立年次は確定し得ないが、十二世紀はじめには成立していたと推定される³⁰⁾。

□惟みれば、末代の学士未だ必ずしも本文を習はず。茲に困りて、纔かに文書を学ぶと雖も、本義を識り難し。譬へば、田夫の苗を作りて穂を作らざるが如し。惟只力をのみ竭して、是何の益か有らんや、者れば、粗之を注して小童に譲ると云々³¹⁾。

序及び内容から推すに、本来童蒙教訓、特に貴族・官僚・寺家の子弟教育の資として編集されたもので、撰者も学僧または仏教兼学の儒者であろう。さらに三巻のうち。上巻は世俗の話題を収め、数話を除けばすべて中国説話である。宇宙草創、三皇五帝の事跡以下、唐代以前の勸学・教養説話、史話、故事逸話類を収めている。『今昔』巻十と『注好選』の共通話は全て上巻に集中しており、中国説話中心となっているわけで、漢籍との関係、特に上述したように『蒙求』との関係を除くことはできない。

『蒙求』の日本伝来時期ははっきりしないが、早くも878年にもその記録があるし、平安時代に広く幼学書として使われた。1204年に『蒙求』を和訳した『蒙求和歌』が作られたことや『今昔』巻十のおおよそ四分の一が共通していることを考えると、『蒙求』が『今昔』巻十に影響を与えたのは事実であろう。しかし、直接的な影響よりは『注好選』のような、『今

30) 注16)の前掲書 187頁。

31) 注29)の前掲書 引用。

昔』の先代説話集を媒介とした可能性が高いと思う。そうすると、『今昔』巻十、『注好選』、『蒙求』の三者には相互関係があるといえよう。この章ではこの三者の共通話について考察する。

例8-1

| | |
|----------------------|--|
| <p>蒙求 (養由号猿)</p> | <p>淮南子に曰く、楚王に白猿有り。自ら之を射れば即ち矢を搏りて照る。①養由基をして之を射しむ。始めに弓を調り矢を矯むれば、未だ発せざるに猿樹を擁いて号ぶ。</p> |
| <p>『注好選』上69</p> | <p>此は武者なり。昔②天に十の日有り。天下の為に大旱有り。即ち③養由九つの日を射落して、即ち此の一つの日を有らしむ。</p> |
| <p>『今昔』十16</p> | <p>今昔、震旦ノ□代ニ④養由ト云フ人有リケリ。⑤心極テ猛クシテ、弓射ル事、射ト射ル者掌ヲ指スガ如トシ。然レバ、国王、此ノ養由ヲ武芸ノ道ニ被仕ルニ、毎事ニ不愚ズ。此ニ依テ、国挙テ養由ニ随フ。而ル間、⑥天ニ日十出タリ。一シテ照スソラ、雨不降レバ猶シ旱也。何ニ況ヤ、日十出デテ、照スニ、草木可堪キニ非ズ。皆枯レ失ヌ。此レニ依テ、国王ヨリ始メテ大臣・百官及ビ民、皆嘆キ悲ム事無限シ。其ノ時、養由、心ニ思ハク、「天ニハ日一出ル、此レ人ノ業力ニ依テ有ル事也。而ルニ今、十ノ日俄ニ出タリ。九ノ日ハ、必ズ此レ、国ノ為ニ怪ヲ致セルナラム」ト思テ、養由、弓ヲ取テ箭ヲ矯テ、天ニ向テ日ヲ射ルニ、九ノ日ヲ射落シタリ。本ノ一ノ日ハ、天ニ在シテ照ス事、本ノ如シ。其ノ時ニ、養由ガ為ニ射落ルル所ノ九ノ日ヲバ、国ノ怪也ト云事ヲ知ヌ。然レバ、皆人、養由ヲ讚メ感ズル事無限シ。⑦此レヲ思フニ、心猛キ人ノ為ニハ、変化ノ者モ顕ルル事也トゾ人云ケルトナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |

上の三話は①養由(基)という名前と矢という素材が共通的に出ているが、

『蒙求』には十の日の話は出ていない。しかし、『注好選』と『今昔』は、天の九つの日を射て落としたと言うあらすじが共通している。もともと㉔の天に十の日の出る話は『淮南子』の羿の話である。『淮南子』の養由(基)が『蒙求』に引用され、『蒙求』の話に『淮南子』の羿の話が加わって新しい話が作り出されたと思う。しかし、『注好選』と『今昔』の話は内容上の大筋は同じであるが、『今昔』編者は㉕「変化ノ者モ顕ルル事」のような話末語評を通して、神仏に近い靈驗性や怪異性を語っている。

また、『今昔』・『注好選』・『蒙求』の三者の類話の多くが、話の内容には差があるが、このように人物の特徴を借りて作った話がよくある。次の例9-1の中においても『今昔』編者は『蒙求』から人物的特徴を借りて、説話を組み立てたが、独特な批評を記している。

例9-1

| | |
|----------------------|---|
| <p>蒙求 (李広成蹊)</p> | <p>前漢の李広は隴西成紀の人なり。世世射法を受く。武帝の時左北平太守に拜せられ、匈奴号して漢飛將軍と曰いて之を避け、数歳界に入らず。㉖広出獵し、草中の石を見て、以て虎と為して之を射るに、石の中り矢を没す。之を視れば石なり。他日射るに入るること能わず。…<後略></p> |
| <p>『注好選』上70</p> | <p>此は武者なり。即ち一つの虎有り。㉗李広が母を害し失ふ。李広人の言を得て来りて見るに、実なり。弓矢ヲ取りて、跡に付きて追ひ行く。即ち山の口の野の中に斑なる岩有り。即ち㉘虎と見て之を射るに、矢の中より已に融りぬ。寄りて見るに岩なり。返りて復之を射るに、矢を入れず。</p> |
| <p>『今昔』十17</p> | <p>今昔、震旦ノ□代ニ李広ト云フ人有ケリ。心猛クシテ弓芸ノ道ニ勝レタリ。而ル間ニ、㉙一ノ虎ヲ、李広ノ母ヲ害セリ。…</p> |

| | |
|--|--|
| | <p>然レバ李広、弓箭ヲ取テ、虎ノ跡ヲ尋テ追ヒ行ク。即チ、一ノ山口ノ野中ニ追ヒ至テ見ウニ、虎臥シタリ。李広、此レヲ見テ喜テ射ルニ、虎ニ箭ヲ射立テツル事、彌ノ齊ニ至ル。李広、⑥我ガ母ヲ害セル虎ヲ射ツル事ヲ喜テ、寄テ見ルニ、射タル所ノ虎、既ニ虎ニ似タル岩ニテ有リ。「奇異也」ト思テ、其ノ後、此レノ岩ヲ射ルニ、箭不立ズシテ踊リ還ル。爰ニ李広思ハク、「我ガ母ヲ害セル虎ヲ射ムト思フ心ノ深キニ依テ、岩ニモ箭ハ立ツ也ケリ。岩ゾト思テ射ル時ニハ不立ザリケリ」ト思テ、泣泣ク還ヌ。㉞其ノ後、此ノ事、世ニ広ク聞エテ、李広ガ虎ヲ追テ射タル心ヲ讚メ哀ビケリ。然レバ、実ノ心ヲ至サム時ハ、諸ノ事如此キモ有ヌベキ也ケリトゾ世ノ人云ケルトナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |
|--|--|

『今昔』と『注好選』は同類話であるが、『蒙求』とは人物の名前「李広」と石に矢を射るという筋(⑥)だけが一致している。しかし、矢を射る原因は『蒙求』ではただ石を錯覚することであるが、『今昔』と『注好選』の⑥には虎から害された母が登場して、孝の意味附与が見られる。そして、例8-1のように『今昔』と『注好選』に「矢」の名人が出て、両書の当該説話が隣接している、これは、『注好選』の影響を受けたためであると説明できるだろう。しかし、『今昔』編者は話末語評を通して、㉞のように世間に託した編者の讚嘆や教訓として、『注好選』を受容している。

例10-1

| | |
|----------------------|--|
| <p>蒙求 (季札挂劍)</p> | <p>史記にいふ、呉の季札は王壽夢の季子なり。初め使して北のかた徐君に過る。徐君、季札の劍を好めども、口敢て言はず。季札心に之を知るも、上国に使ひするが為に未だ獻ぜ</p> |
|----------------------|--|

| | |
|-----------------|--|
| | <p>ず。還りて徐に至れば、徐君已に死す。乃ち其の宝剑を解き、徐君の冢樹に懸けて去る。従者曰く、徐君已に死す。尚誰に予ふるや、と。季子曰く、然らず。始め吾心に已に之を許す。豈に死を以て吾が心に倍かんや、と。札延陵に封ぜらる。故に延陵の季子と號す。新序に曰く、徐人嘉して之を歌ひて曰く、延陵の季子故を忘れず、千金の劔を脱きて丘墓に帶ばしむ、と。</p> |
| <p>『注好選』上73</p> | <p>此の武者は、丹の使と為りて外の国に往く。途中に於て洪水に遭ひて進退し難し。即ち㊦猪君の家に宿つて、二月ありて天晴れ、雨止みて出でて行く。時に猪君に語りて云はく、「吾が命と共に惜しむは、帶ける所の劔なり。謀叛を戮いて還らむに、必ず此の劔を譲らむ」と。已に過ぎ退りて、敵地にして一年経て、遂に賊の首を殺つて還る。時に猪君死して家門荒廢し、村邑野原と成れり。即ち紀札故老に逢ひて猪君を問ふに、指を用して彼の墓を教ふ。墓の上に㊧榎生ひたり。丈三尺なり。劔を解いて此の木に掛けて、恩を酬い約を謝して以て去りぬ。</p> |
| <p>『今昔』十20</p> | <p>今昔、震旦ノ□代ニ㊡紀札ト云フ人有ケリ。武芸ノ道ニ勝人レテ心直シ。其ノ人、国王ノ使トシテ謀反ノ輩ヲ罰ムガ為ニ外洲ヘ行ク間、途中ニシテ忽ニ大雨ニ会ヌ。然レバ、洪水ニ依テ、道ヲ行ク事不能ズシテ、㊢猪君ト云フ人ノ家ニ宿ヌ。二月を経テ、雨止ミ天晴レテ後、猪君ガ家ヲ出デテ行ムト為ルニ、紀札、猪君ニ語テ云ク、「我レ、君ガ家ニ宿シテ既に月来を経たり。此レ、恩ヲ可報キ事也。而ルニ、我レ、命ト共ニ惜ム物有リ。此ノ帶セル劔也。此レヲ君ニ与ヘムト思ハフ。而ルニ、我レ、洲ニ行テ謀反ノ者ヲ罰テ還ラム時ニ、此レヲ与ヘム」ト云テ出デテ行ヌ。既ニ敵ノ所ニ行テ、一年ヲ経テ心ノ如ク罰テ、頸ヲ斬テ還ル時ニ、君ガ家ニ寄テ劔ヲ与ヘムト為ルニ、猪君ガ家ノ門既ニ荒廢シテ野ト成レリ。紀札、此レヲ見テ怪ムデ、一ノ古老ノ人ヲ尋テ猪君ヲ問フニ、古老ノ云ク、「猪君疾ク死ニキ」ト。紀札云ク、「其ノ墓ハ何コ</p> |

| | |
|--|--|
| | <p>ゾ」ト。古老、手ヲ以テ指テ、「其ノ墓、彼レ也」ト教フ。墓ノ上ヲ見レバ、三尺許有ル㊦榎ノ木生タリ。紀札、教ヘニ随テ、其ノ墓ニ行テ、帶セル所ノ劍ヲ解テ、此ノ榎ノ木ニ懸ケテ、約ヲ謝シ恩ヲ酬テ去ヌ。㊧然レバ、心有ル人ハ如此クゾ有ケル。身ノ護トモシ、家ノ財トモ可為キ劍ナレドモ、約ヲ不忘ザルガ故ニ、其ノ主無シト云ヘドモ、墓ノ木ニ懸テゾ還リケルトナム語り伝ジェタルトヤ。</p> |
|--|--|

原拠は『史記』の「季札伝」であるが、流布は『蒙求』の「季札挂劍」に依ったと思われる。『今昔』十20が『注好選』上73に依っていることは明確である。まず、㊦紀札と言う名前である。本来、「季札」という名前が『注好選』と『今昔』が共通しており、㊧猪君も原拠『蒙求』には「徐君」として出ている。さらに、㊦榎も本来は「冢樹」である。㊧は『注好選』には無い部分で、『今昔』選者の意見が反映されている。

例11-1

| | |
|----------------------|---|
| <p>蒙求 (高鳳漂麦)</p> | <p>(1) 麦を庭中に曝し、鳳をして鶏の来りて拾ふを護らしむ、折からにはかに雨降るも、鳳は鶏を逐ふ竿をしながら一心に経書を誦みて、㊦潦水の麦を流すをも覺らざるなり</p> <p>(3) 後に名儒と為り、年老ゆれども志を正しく執りて倦まざれば、名声大に場る…自ら名を汚して免るを得たり、後直言の科に挙げられ公車に召されたれども、病に託して身を隠し、一生漁釣に終りたり</p> |
| <p>蒙求 (買妻恥醜)</p> | <p>(2) " …妻も忍ぶ能はず、終に離縁を請求せり、昧臣曰ふに、㊦我れ年五十になるならば当に富貴となるべし、今、年己に四十余なり、</p> <p>(3) " …故郷の呉の界に入れば、前妻と其の再縁の夫との道</p> |

| | |
|----------|--|
| | を掃除するをみ、後車に命じて其の夫妻を載せ、太守の官舎に到らしめ、之を園中に置き衣食を給して昔の功に報いたり、故妻は曩に離縁せしを悲み、遂に自ら縊れ死にぬ、買臣之を憐み、其の夫に錢を与へて厚く之を葬むらしむ、… |
| 『注好選』上32 | (1)此の人は、書を読みて晨夕に止まず。其の妻妻を曝して、鳳に之を守らしむ。竿を以れ手に授けて、鶏雀を追はしめき。即ち天より大いなる雨ふりき。而るに鳳竿を執りて書を読みて、 ④ 麦を流すことを覚らず。妻の還りて罵るに始めて悟る。 |
| 『今昔』十25 | (1)其ノ後、④ 鶏、出来テ此ノ庭ノ麦ヲ食フ。然レドモ、高鳳、文ヲ学スルニ他ノ心無ガ故ニ、此レヲ不見入ズシテ、鶏、心ニ任セテ麦ヲ皆食ヒツ。 (2)高鳳ノ云ク、「我レハ、今⑤ 三年有テ、富貴ノ身ト可成シ。汝、其ノ時ヲ可待シ」ト云ヘドモ、妻、更ニ其ノ言ヲ不信ズシテ去離レヌ。其ノ後、其ノ妻、算州ト云フ所ニ行テ、夫ニ嫁ヌ。 (3)四年ヲ経テ、高鳳、遂ニ算州ノ刺史ニ任ゼリ。…刺史、髣ニ旧キ妻ノ簾ノ中ニ有ルヲ見テ、輿ヲ止メテ、人ヲ以テ告テ云ク、「我レハ、汝ガ旧キ夫ニハ非ズヤ。汝ハ、我ガ本ノ妻ニ非ズヤ」ト云ヒ遺タレバ、妻、此レヲ聞テ大キニ喜テ、簾ノ中ヨリ来タリ。近ク召シ寄セテ見ルニ、実ナレバ、哀レニ思フ事無限シ。 刺史、旧キ心不失ズシテ、旧妻ヲ召取テ本ノ如ク令居メテ養ヒケレバ、刺史ノ今ノ妻ハ恥テ去ニケリトナム語り伝ヘタルトヤ。 |

『今昔』十25は『蒙求』の「高鳳漂麦」「買妻恥醜」の二つの話を一つの話に造りなおしたものである。『注好選』は『蒙求』「高鳳漂麦」の後の部分を除いて、前の部分は忠実に写しているが、『今昔』の中では(1)の所も少し異なる。しかし、それは、編者が意志を持って変えたものでは

なく、誤訳とか錯覚の結果であろう。

(2)の内容をみると、『今昔』は『蒙求』 「買妻恥醜」のプロットを借りてきたが、(3)の結末は全く違っている。『蒙求』の(3) ”では買臣の前妻が自ら恥ずかしくて自殺するが、『今昔』の(3)は新しい妻が自分が恥ずかしくて家を出る。さらに、『今昔』の編者は話末に刺史(高鳳)が昔の事を忘れずに前妻を扶養したという話を添えている。

例12-1

| | |
|----------------------|---|
| <p>蒙求 (蘇武持節)</p> | <p>前漢の蘇武字は子卿、杜陵の人なり。武帝の時、中郎將を以て④節を持ち⑤匈奴に使ひす。單于之を降さんと欲し、迺ち武を幽して大窖中に置き、絶えて飲食せしめず。天雪を雨らす。武、臥しながら雪を齧み、施毛と并せて之を咽み、数日なるも死せず。匈奴以て神と為し、乃ち武を北海の上に徙し羝を牧はしめ、羝乳せば乃ち歸るを得ん、と。武、漢節を杖きて羊を牧ひ臥起に操持し、節旄盡く落つ。昭帝立ち、匈奴漢と和親す。漢、武等を求む。匈奴詭りて言ふ、武死せり、と。常惠、漢の使者に教へ言はしむ、天子上林中に射て鴈を得。足に帛書を係くる有り。言ふ某の澤中に在り、と。是に由つて還るを得たり。拜して典属国と為す。秩中二千石とし、錢二百万・公田二頃・宅一区を賜ふ。武、⑧匈奴に留まること十九歳なり。始め強壯を以て出で、還るに及び⑨鬚髮盡く白し。宣帝の時に至り、武の節を著せし老臣たるを以て、朔望に朝せしめ、號して祭酒と稱す。年八十餘にして卒す。後麒麟閣に圖畫し、其の形貌に法り、其の官爵姓名を署す。</p> |
| <p>『注好選』上71</p> | <p>此の④武者は漢帝の人なり。皇の所使と為て⑤胡塞へ征く。十六にして④勅を奉じて、二十四³²⁾にして歸朝す。即ち⑧十九年の転蓬に⑨髮白きこと鶴の頭の如きか。</p> |

| | |
|----------|---|
| 『今昔』 十30 | <p>今昔、漢ノ武帝ノ代ニ、㉑蘇武ト云フ人有ケリ。天皇、□依テ、此ノ人ヲ㉒胡塞ト云フ所ニ遣タリケルニ、久ク返リ不得ズシテ、年来、其ノ所ニ有ケルガ程ニ、亦、㉓衛律ト云フ人、其ノ所ニ行タリケルニ、衛律、行き着クマニ、其ノ所ノ人ニ先ヅ、「蘇武ハ有ヤ否ヤ」ト問ケレバ、其ノ所ノ人、蘇武ハ有ケルヲ隠サムガ為ニ、謀ヲ成シテ、「蘇武、早ウ失テ年久ク成ヌ」ト答ケルヲ、衛律、「隠シテ虚言ヲ云フゾ」ト心得テ、「蘇武、不死ズシテ未ダ有ル也。此ノ秋、㉔雁ノ足ニ文ヲ結付テ、蘇武ガ書ヲ天皇ノ奉ケレバ、雁、王城ニ飛ビ来テ、其ノ書ヲ天皇ニ奉タリキ。天皇、其ノ書ヲ御覽ジテ、蘇武于今有リト云フ事ヲ思シ食タリ。此レ、謀也」ト云ケレバ、其ノ所ノ人、謀ニテ有ケレバ、「隠シテ益無シ」ト思テ、「実ニハ未ダ不死ズシテ有リ」ト云テ、蘇武ヲ衛律ニ会セタリケリ。雁ノ足ニ文結付タル事ハ、衛律ガ謀ニ言ナレドモ、此レニ依テ蘇武出来レバ、世ノ人、此レヲ聞テ、衛律ヲゾ讚メ感ジケル。然レバ、虚言ナレドモ、事ニ随テ可云キ也ケリ。衛律ガ謀ノ言ハ賢カリケリナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |
|----------|---|

『漢武帝、蘇武遣胡塞語 第三十話』が『俊頼髓脳』を出典にすることは、前述したとおりであるが、『注好選』にもこの話が出る。しかし、『注好選』の場合、雁の故事ではない。原拠は『漢書』列伝・蘇武伝であるが、流布は『蒙求』蘇武持節に負うところが大きかったと見られる³³⁾。

『注好選』の㉑武者のところは他の諸書ではない武人として蘇武を描写しているが、『今昔』の編者は、卷十の他の説話とは違って、㉑のように、蘇武に対する人物評価を除いた。さらに、『今昔』卷十30は「蘇武」より

32) 誤字と見られる。

33) 注29)前掲書264頁の注参照。

「衛律」の賢いところを語っている。『今昔』編者は表題である「漢武帝、蘇武遺胡塞語」に重点を置くより、雁の故事に重点を置いている。これは『今昔』巻十全般にわたって目立つ重要な編纂方式と考えられる。

(2) 『注好選』の受容

前章は『今昔』・『注好選』・『蒙求』の関係について考察してきたが、この章では、『今昔』と『注好選』の共通話を中心にその受容と変容について考えてみたい。

例13-1

| 『注好選』上85 | 『今昔』十9(第三段) |
|---|--|
| <p>昔、孔子車に駕して其の道を行く。三人の七才なる童有り。土の城を作りて遊戯す。時に孔子来りて小兒に告げて云はく、「小兒、汝等、道を逃けて吾が車を過ぐせ」と。小兒等嘆きて曰わく、「未だ車を逃くる城をば聞かず。城を逃くる車をば聆く」と。仍りて孔子、車を却けて城の外より過ぐ。敢へて理を横にせず。</p> | <p>而ル間、孔子、車ニ乗テ道ヲ行き給フニ、其ノ道ニ七歳許ノ童三人有テ戯レ遊ブ。其ノ中ニ一人ノ童不戯遊ズシテ、道ニ当テ土ヲ以テ城ノ形ヲ造レリ。其ノ時ニ、孔子、其ノ側ニ来リ給テ、童ニ語テ云ク、「汝等、速ニ道ヲ避テ我ガ車ヲ可過シ」ト。童咲テ云ク、「未ダ不聞ズ、車ヲ避ル城ヲバ。但シ、城ヲ去ル車ヲバ聞ク」ト。然レバ、孔子、車ヲ去テ、城ノ外ヨリ過ギ給ヒヌ。</p> |

『今昔』十9の場合、導入部は孔子の人物紹介から始まり、孔子に関する逸話がオムニバス形式で集まっている。また、前例3-1でも十9の一部の

逸話が『俊頼髓脳』を受容したものであることを既に指摘した。例13-1の『今昔』十9と『注好選』との共通している部分は、孔子を紹介する導入部の次に語られる逸話である。『注好選』とは同文的同話であり、『今昔』編者が一つの説話の中で複数の資料を活用した可能性がうかがわせるところである。

例14-1

| 『注好選』上75 | 『今昔』十19 |
|---|--|
| <p>此の人は、勅使と為て外の州に行く。即ち妻にだんじて云はく、「吾が鏡を二つに破りて、半ばは君に得せしめ、半ばをば吾責たらむ。由は、若し吾他の女を娶いせば、此の半ばの鏡飛び来りて君が鏡に合へ。若し君他の男に有らば、亦以て此の如し」と。妻許諾して、之を得て箱の内に置いて◎思惟らく、「<u>実に然ること難し</u>」と。即ち蘇規家を出でて十日有りて、妻犯すこと有り。半ばの鏡、蘇規が所に飛び来りて合ふこと約の如し。</p> | <p>今昔、震旦ノ□代ニ蘇規ト云フ人有ケリ。此ノ人、国王ノ使トシテ遙ニ遠キ洲ヘ行ケルニ、蘇規、妻ニ語テ云ク、「我レ、国王ノ使トシテ遠キ州ヘ行ク。汝ト不相見ズシテ久クアルベシ。然レバ我レ、他ノ女ニ不可娶ズ。汝亦、他ノ男ニ不可近付ズ。此レニ依テ、一ノ鏡ヲニ破テ、半ハ汝ニ預ム、半ハ我レ持テ行ム。若シ我レ、他ノ女ニ娶バ、我レ半ノ鏡必ズ飛び来テ、汝ガ鏡ニ可合シ。亦若シ、汝ヂ、他ノ男ニ娶バ、亦汝ガ持タル半鏡飛び来テ、我ガ半鏡ニ可合シ」ト契ルニ、妻喜テ半鏡ヲ得テ、箱ノ内ノ納メテ置キツ。亦、蘇規モ此ノ半鏡ヲ取テ、身ヲ放ツ事無クシテ、家ヲ出デテ彼ノ洲ヘ行ヌ。其ノ後、程ヲ経テ、妻、家ニ有テ他ノ男ニ娶ニケリ。蘇規、其ノ事ヲ不知ズシテ外洲ニ有ル間、妻ノ半鏡、忽ニ飛び来テ蘇規ガ半鏡ニ合フ事、沙ノ如シ。⑥<u>然レバ蘇</u></p> |

| | |
|--|---|
| | 規、我ガ妻忽ニ約ヲ誤テ、他ノ男ノ娶 ニケリト云フ事ヲ知テ、約ヲ違タル事ヲ恨 ケリ。㉔然レバ、実ノ心ヲ至ス時ニハ、 心無キ物ソラ如此クゾ有ケルトナム語り 伝ヘタルトヤ。 |
|--|---|

『注好選』とは同文的同話であり、両書以外同話は見当たらない³⁴⁾。しかし、新大系『今昔』の注に同類話として『唐物語』10が挙げられている。『唐物語』10の場合、別れに際し鏡を半分に割り、それぞれ片割れを所持するというモチーフは共通するものであり、妻が他のおとこに嫁ぐ点も同様であるが、男女は再会し、復縁する結末になっている点では例14-1と差がある。

『注好選』㉔の妻が蘇規の話信じないところは『今昔』には無いが、これは『今昔』選者が㉔の話末語評と結びの間に混乱が生じないように、この部分を単純化したためだと考えられる。㉔以下は『注好選』には無いもので、編者によって加筆されたところであるが、特に㉔の部分は『今昔』選者の意見が反映されている。

例15-1

| 『注好選』上67 | 『今昔』十21 |
|--|---|
| 此の女は長安の里人なり。其の夫、人の為に敵と有り。敵の人夫を殺さむと欲て来至せり。其の夫無きに依りて妻の父を縛る。縛らると聞きて内より出でぬ。即 | 今昔、震旦ノ□代ニ長安ニ一人ノ女有ケリ。㉔形美麗ニシテ心直也。其ノ女ニ夫有り。其ノ夫敵有り。其ノ敵、此ノ女ノ夫ヲ殺サムガ為ニ、其ノ家ニ来レ |

34) 注29)の前掲書 267頁の注。

| | |
|--|--|
| <p>ち仇女に謂ひて云はく、「汝が夫を出さずは、将に汝が父を殺さん」と。仇に謂ひて云はく、「豈夫に依りて父を殺さむ。君吾が言はむに随ひて、後の時を以て吾が家に來至せよ。夫を殺さしめむ」と。即ち云はく、「寢の上に夫は東首、妾は西首なり。後に來りては、東首を斬るべし」と。是に仇既に時を知りて、常の方に歸りぬ。時に妻夫に語りて云はく、「今夜よりは、吾東首に宿たらむ」と。即ち仇の來りて之を殺して、妻の夫に代るを見る。仇大きに傷み嘆きて、悲しみて曰はく、「貞女は夫に代りて命を捨つ」と。乃ち仇の心を解きて永く骨肉たり。</p> | <p>り。其ノ時ニ、其ノ夫、他所ノ行テ其ノ家ニ無シ。敵見ルニ、夫無ケレバ、妻ノ父ヲ捕ヘテ縛ル。女、父被縛レタリト聞テ、内ヨリ出タリ。敵、女ヲ見テ告テ云ク、「<u>㊦我レ、汝ガ夫ヲ殺サムガ為ニ此ニ來レリ。而ルニ、汝ガ夫無シ。汝ヂ、若シ夫ヲ不出ズハ、汝ガ父ヲ殺サムトス</u>」ト。…(中略)…</p> <p>其ノ後、夫來レリ。妻、夫ニ語テ云ク、「今夜ハ、我レ東枕ニ臥サム。君ハ西枕ニ臥セ」ト云テ臥ヌ。即チ、敵入り來テ、東枕ナル妻ヲ、「此レ、夫ト也」ト思テ殺シチ。其ノ後、見レバ、既ニ妻ヲ殺セリ。夫ハ命ヲ存セリ。敵キ、此レヲ見テ痛ミ歎ク事無限シ。然レバ、此レ妻ノ、夫ニ代テ、枕ヲ替ヘテ被殺ル也ケリト知ヌ。其ノ後、敵大キニ此ヲ哀ムデ、永ク怨ノ心ヲ止メテ、始メテ骨肉ノ契ヲ成ケリ。<u>㊦然レバ、昔ハ如此ク、我が身ヲ棄テ夫ノ命ヲ生クル女人有ケリ。此レ、極テ難有キ事也トゾ、聞ク人皆云ヒケルトナム語チ伝ヘタルトヤ。</u></p> |
|--|--|

両話は同文的同話として、『今昔』の㊦や㊧のように編者の描写的加筆以外は差がない。ただ、『今昔』㊦は『注好選』にはない『今昔』編者の加筆で、この話末語評は前例14-1の内容と対照的に見られる。前話が夫との信義を破った話であれば、例15-1は話末語評㊦のように自分を棄てて夫を助ける話になっている。これは、『今昔』編者が隣接する説話

を互いに関連するように構成する配列法によるものと考えられる。

例16-1

| 『注好選』上97 | 『今昔』十27 |
|--|--|
| <p>往、三人有りき。同父の一腹の兄弟なり。①田祖・田達・田音と云ふ。即ち其の祖の家に前栽あり。②四季に花を開く荊三莖在りて、一花は白、一花は赤、一花は紫なり。往代より相伝へて財と為して、色に随ひ香に付きて、千万の喜び剩り有り。人々欣ふと雖も未だ他所に有らず。即ち父母亡せて後に、③此の三人身極めて貧し。相語らひて云はく、「吾が家を売りて他国に移往せむ」と。時に隣国の人、三荊を買ふ。己に之を売りて値を得つ。其の明旦に、④三荊花落ち葉枯れたり。三人之を見て歎ず。未だ此の如き事をば見ず、と。呪して曰はく、「吾が三荊、別れを惜しむが為に枯れたり。吾等留まるべし。復返りて栄かむや」と。即ち値を返す。明るく日に随ひて故の如く盛りなり。故に去らず。是を以て契をば三荊と曰ふなり。</p> | <p>今昔、震旦ノ□代ニ兄弟三人有ケリ。①兄ヲバ田達ト云ヒ、次ヲバ田旬ト云ヒ、次ハ田畑ト云ヒケリ。父母死テ後、三人共ニ一家ニ住シテ世ヲ過ス。②其ノ家ニ紫ノ荊有リ。四時ニ花榮テ面白キ事無限シ。然レバ、世ニ希レナル物ト云テ、見ル人皆ナ、此ノ荊ヲ不感ズト云フ事無シ。而ル間、③何ナル事カ有ケム、此ノ三人ノ兄弟、同心ニ相語テ云ク、「去来我等、此ノ家ヲ売テ、其ノ値ヲ三ニ分テ、三人シテ分チ取テ此ヲ去リナム」ト云テ、即チ家ヲ売テ、値ヲ各分チ取テ去リナムト為ル日、此ノ荊、明旦ヲ以テ、三ニ分テ堀リ取テ去リナムト為ルニ、其ノ夜、④忽ニ其ノ荊失ヌ。明旦ニ見ルニ、荊無シ。其ノ時、三人ノ兄弟、亦相ヒ語テ云ク、「此ノ荊、人不取ズシテ既ニ失ニタリ。此レ、我等ガ此ヲ去ル故也。然レバ、草木ソラ尚シ別離ヲ惜ム也ケリ。何況ヤ人ヲヤ。然レバ、我等、猶此ヲ不去ジ」ト云テ、即チ値ヲ返シテ、三人共ニ本ノ如ク居ヌ。其ノ時、荊、亦榮エ生ル事、本ノ如キ也。⑤然レバ、草木モ皆、昔ハ如此クゾ有ケルトナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |

両話は、同文的同話というよりは同類話といえる。両話において変容はまず、①の人物の名前の差があり、田達の名だけ共通している。②の場合も同じ荊であり、他の叙述も似ているが、その形に差がある。また、③の家を売って、他国へ行く理由について、『注好選』は「身極めて貧し」と明示しているが、『今昔』は曖昧な表現で終わっている。④の荊の変化においても両話に違いが見える。このように、両話は似ているようで異なる形、すなわち、話の大筋と素材を受容しつつ、その細部においては変容している。しかし『今昔』において説話変容が顕著に見られるところは、話末評⑤であろう。⑤はやはり『注好選』には無い『今昔』編者の加筆であり、説話の内容から推定される教訓は兄弟の友誼であろうが、話末評が語るのは過去の神聖化と草花の靈験である。

例17-1

| 『注好選』上89 | 『今昔』十32 |
|---|---|
| <p>荊保と云ひし人は、①飢饉の為に家貧しきが故に、父と共に隣の州に行きて人の財を盗む。即ち父と子と財を盗む間、家人並びに近き辺、各々出でて叫びて之を追ふ。二人逃げ走ること、猫に逢へる鼠の如し。即ち子は疾く走り、父は遅く逃ぐ。垣を破りて出づる時に、子先に出でぬ。父が頭は垣の外に在り、其の足は垣の内に捕へられぬ。時に荊保、刃を以て父の頸を殺りて去る。②父恥を惜しみしが故に、喜びて痛からず。時の人之を称して孝子と名</p> | <p>今昔、震旦ノ□代ニ、①国王ノ財宝ヲ納メ置タル大ナル庫蔵有ケリ。其ノ蔵ニ財宝ヲ盗ミ取ラムガ為ニ、盗人二人入ニケリ。祖子也。祖ハ蔵ノ内ニ入テ財宝ヲ取り出ス。子ハ外ニ立テ、取り出ス物ヲ受ケ取テ立テリ。而ル間、蔵ヲ護ル者等、来ル。外ニ立テル子、其ノ気色ヲ見テ思ハク、「人来ルト云フトモ、我レハ逃テ不可捕ズ。②内ニ有ル我が祖ハ、逃ゲ得ム事不能ズシテ、必ズ捕レナムトス。生テ恥ヲ見ヨリハ、不如ジ、祖ヲ殺シテ誰人ト云フ事ヲ不知レデ</p> |

| | |
|-----|--|
| づく。 | 止ミナム」ト思ヒ得テ、子、近ク寄テ祖ニ云ク、「既ニ人来ニタリ。何ガセムト為ル」ト。祖、此レヲ見テ、「何ラ、何コニ有ルゾ」ト云テ、蔵ノ内ニ乍立ラ顔ヲ指シ出タルヲ、子、其ノ祖ノ頸ヲ大刀ヲ以テ打チ落シテ、頸ヲ取テ逃テ去ヌ。〈後略〉 |
|-----|--|

『今昔』 132の出典は未詳で、原拠は『生経』である。さらに、もとは天竺の話題になっている³⁵⁾。『注好選』と共通する例17-1は当該『今昔』説話の導入部である。両話は盗人である親子が捕えられた時、身分を隠すために子が父の首を斬るという同じ大筋をもっているが、『注好選』では『今昔』に比べて子の行動がかなり正当化されている。まず、『注好選』①を見れば盗人になった理由として飢餓と家貧を挙げているのに対して、『今昔』①は、ただ財宝を盗む目的だけが語られている。さらに、『注好選』②では父が喜んで殺され、子は孝子として称されるが、『今昔』②では子の独断的判断として父の首を斬ることになっている。『今昔』編者はその子を孝子として受容したのではなく、説話の後に続く非凡な人として描写するために機智で父の身分を隠す方に変容した。

例18-1

| 『注好選』上72 | 『今昔』 139 |
|--|--|
| 此の武者は秦皇の人なり。少き時に父母の家を去りて、皇に服いて過半に至るまで親を視ず。老年に及びて、秦皇に | 今昔、震旦ノ秦ノ代ニ燕丹ト云フ人有ケリ。此ノ人、心猛ク悟り有リ。幼稚ノ時ニ、国王ニ随テ秦ニ趣ク。其ノ後返 |

35) 注1)の前掲書 355頁の注。

| | |
|--|---|
| <p>奏して帰らむことを請ず。更に許さず。復請ずれば、皇の云はく、「<u>㉑鳥の頭白く</u>、<u>㉒馬に角生ひむ</u>、此の時に尔を許さむ」と。乃ち<u>㉓丹天に仰ぎしかば</u>、首白き鳥来り、<u>㉔地に伏しかば</u>、馬に角生ひて来りき。</p> | <p>ラムト思フト云ヘドモ、返ル事ヲ不得ズシテ父母ヲ見ル事無シ。此レニ依テ、燕丹、父母ヲ恋悲テ、国王ニ返ラム事ヲ請フニ、更ニ不許ズ。而ニ、猶泣キ悲ムデ、返ラム事ヲ請ニ、国王ノ宣ハク、「汝ヂ、然ラバ<u>㉑白キ鳥ノ頭</u>、<u>㉒白キ馬ノ角生タラムヲ</u>我レニ令見メヨ。其ノ時、許シテ汝ヲ返サム」ト。燕丹、此レヲ聞テ、<u>㉓泣キ悲ムデ</u><u>㉔天ニ仰テ願フニ</u>、忽ニ白キ鳥ノ頭ヲ得タリ。<u>㉕地ニ伏テ請フニ</u>、角生タル馬來レリ。此レヲ得テ、国王ニ申スニ、国王、「奇異ノ事也」ト思テ、速ニ燕丹ヲ返シ許シツ。然レバ、燕丹、思ヒノ如ク、旧キ郷ニ返テ、父母ヲ見テ悲ミ喜ビケリトナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |
|--|---|

両話は同文的同話である。まず、㉑は同一であるが、『今昔』の場合㉒「白キ馬ノ角生タラムヲ」と㉑「白キ鳥ノ頭」と同様で馬も「白い馬」であるが、『注好選』㉒には「白い」という表現は見当たらない。『今昔』㉓の後に出る「馬」は㉒「白キ馬」とは異なる形となっている。これは、『今昔』の編者の『注好選』に対する意識と思われる。

例19-1

| 『注好選』上74 | 『今昔』十40 |
|---|---|
| <p>昔、二人の上戸有り。謂はく利徳・明德なり。三日を過ぎず、相互ひに行きて酒を飲む。即ち利徳田獮の為に出でて</p> | <p>今昔、震旦ノ□代ニ、利徳・明德ト云フ二人ノ上戸有ケリ。此ノ二人、三日ヲ不過ズ、常ニ相ヒ互ニ行き会テ、酒ヲ</p> |

| | |
|---|--|
| <p>無き時に、明德来れり。主無きが故に、坏を乞ひて池の橋の上に居え、水を汲みて盞を差して水を飲む。燕し已りて還りぬ。其の夕利徳来れり。妻件の事述ぶ。明旦に又、橋の上に於て水を汲むこと前の如くす。頌して云はく、「御酒の欲しきに非ず、明德の芳しきなり」と。</p> | <p>呑ムヲ以テ業トス。而ル間、利徳、田獺ノ為ニ家ヲ出ヌ。明德、利徳ガ出タルヲ不知ズシテ利徳ガ家ニ来レリ。然而、家ノ主無キニ依テ、家ノ内ニ酒坏ヲ請テ家ノ池ノ橋ノ上ニ居テ、池ノ水ヲ汲テ酒坏ヲ指テ、水ヲ呑ムデ返ヌ。其ノ暮ニ、利徳、家ニ返タルニ、妻有テ、利徳ニ明德ガ来レリツル事ヲ語ル。利徳、此レヲ聞テ、明ル朝ニ、池ノ橋ノ上ニシテ水ヲ汲ム事、昨日ノ如クシテ、誦シテ云く、「御酒ノ欲キニハ非ズ。明德ガ芬シキ也」トゾ云ヒケル。昔ハ酒ヲ呑ムニ依テモ、如此キゾ有ケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。</p> |
|---|--|

上の二話は他に類話が見当たらない説話である。しかし、『宴曲集』³⁶⁾(五・酒)に「酒に明德惟馨」のような語句があることで、明德・利徳が酒の徳を象徴する人名として設定されたと思われる。また、卷十のすべての説話のように、話末に『今昔』編者の意見が加筆されている。

36) 新聞唯一 『中世近世歌謡集』日本文学大系44 (岩波書店、1959年)

Ⅲ. 漢籍資料の受容

『今昔』の収録説話は成立過程という観点から、三つの説話群に分類することができる。第一は、同文的性格の先行資料が明らかになっている場合で、『今昔』の先行資料を出典或は出拠という。第二は、同文的性格は強くないが根源資料が明らかになっている場合で、普通その根源資料を原典あるいは原話という。第三は、根源資料が未詳である場合で、この場合においても口承説話を『今昔』編者が直接文字化した可能性は高くないというのが一般的である。この章では、巻十における第二群にあたる説話について検討してみたい。

1. 『莊子』関連説話の主題変化

莊子は中国、戦国時代の思想家であり、紀元前四世紀前半から三世紀にかけての人で、名は周、字は子である。孟子と同時代であり、老子の説を受けて孔子の門徒を反駁した³⁷⁾。著書の『莊子』は、彼の思想を記録したもので、莊子自身の手によるものは内篇の七篇のみで、外篇十五篇、雑篇十一篇は後世莊子学派の人々によって成り立ったものと言われている。

『莊子』に記された故事に基づく成語・成句の類は、現代語の中にも「朝三暮四」³⁸⁾、「無用の用」、「明鏡止水」³⁹⁾、「蝸牛角上の争

37) 校注『宇治拾遺物語』日本古典全集 28 (小学館、1983年、1973年初出) 505頁の注8。

い」40)、「井の中の蛙」41)などのように数多く残っている。『今昔』10・11・12・13・15はいずれも孔子や荘子をめぐるとして、『莊子』を和文に改変した資料によるもので、中国古典の翻案、日本化の実例である。

例20-1

| 『莊子』雜篇「漁父篇」42) | 『今昔』10 |
|--|--|
| <p>孔子緇帷の林に遊び、杏壇の上に休坐す。弟子書を読み、孔子弦歌して琴を鼓す。曲を奏すること未だ半ばらずし、<u>①漁父なる者有り、船を下りて来る。鬚眉交白、被髮揄袂す。原を行りて以て上り、陸に距りて止まる。左手膝に拠り、右手顎を持して以て聴く。曲終りて②子貢・子路を招く。二人俱に對す。客孔子を指さして曰く、「彼は何為なる者か」と。子路對へて曰く、「魯の君子なり」と。客其の族を問ふ。子路對へて曰く、「族は孔氏」と。客曰く、「孔氏は何を治むるや」と。③子路未だ應へず。子貢對へて曰く、「孔氏は、性忠信を服とし、身仁義を行ひ、禮樂を飾し、人倫を選ふ。上は以て世以て天下を利せんとす。此れ孔氏の治</u></p> | <p>今昔、震旦ニ孔子、□云フ所ニ、林ノ中ノ丘ノ有ル所ニ行テ逍遙シ給ケリ。孔子は、琴ヲ彈キ給フ。弟子十余人許ヲ引將テ、廻ニ令居メテ文ヲ令讀ム。 其ノ時、<u>①海ヨリ小船ニ乗タル翁ノ帽子ヲ着タル、漕ギ來テ、船ヲ葦ニ繫テ陸ニ登テ、杖ヲ突テ來テ、孔子ノ彈キ給フ琴ノ調ベノ畢ルヲ聞ク。孔子ノ弟子等、此ノ翁ヲ見テ怪しいシビ思フ間ニ、翁、②弟子一人ヲ招ク。然レドモ、弟子等、目不見係ズシテ不行ズ。③翁、強ニ招ク時ニ、一人ノ弟子寄リヌ。翁、弟子ニ問テ云ク、「此ノ琴彈キ給フ人ハ誰ソ。若シ、国ノ王カ」ト。弟子ノ云ク、「国ノ王ニモ非ズ」ト。翁ノ云ク、「然ラバ、国ノ大臣カ」ト。弟子ノ云ク、「大臣ニモ非</u></p> |

38) 『莊子』の齊物篇。

39) 『莊子』の徳充符篇 応帝王篇。

40) 『莊子』の則陽篇。

41) 『莊子』の秋水篇。

| | |
|--|---|
| <p>むる所なり」と。又問ひて曰く、「有土の君か」と。子貢曰く、「非なり」と。「侯王の佐か」と。子貢曰く、「非なり」と。④客乃ち笑ひて還り、行々言ひて曰く、「仁は則ち仁なり。恐らくは其の身を免れざらん。心を苦しめ形を勞して、以て其の真を危ふくす。嗚呼、遠きかな、其の道に分かるや」と。</p> | <p>ズ」ト。翁ノ云ク、「然ラバ、国ノ司カ」ト。弟子ノ云ク、「国ノ司ニモ非ズ」ト。翁ノ云ク、「然ラバ、何人ゾ」ト。弟子ノ云ク、「只、国ノ賢キ人トシテ公ノ庁ヲ直シ、悪キ事ヲ止メ、善キ事□人也」ト。④翁、此ヲ聞テ疵咲テ云ク、「此レ、極タル嗚呼人也」と云テ、去ヌ。</p> |
|--|---|

例20-1の両話の④は、後述する、孔子に悟りを与える人に関する描写である。『莊子』はこの人物について「漁父なる者有り、船を下りて来る」と描いているが、『今昔』④には翁が「海ヨリ小舟ニ乗タル翁」と描かれている。つまり、『莊子』の「漁夫」という言葉から、『今昔』編者は「海から来た」と類推したものと考えられる。さらに、『莊子』はこの漁父の外観描写を以て漁父が年寄の非凡な人物であると示しているが、『今昔』には「翁」として描かれている。結局、『今昔』の編者は原拠『莊子』の「漁父」という単語からイメージを取り、再構成している。

ところが、本格的な人物変容は次の弟子との会話の場面から行われる。『今昔』⑤の「弟子一人ヲ招ク。然レドモ弟子等、目不見係ズシテ不行ズ」と④の「翁、強ニ招ク時ニ、一人ノ弟子寄りヌ」を見れば、『今昔』で客(翁)と話合っているのは一人の弟子である。これを『莊子』の⑤と比較すれば、『莊子』では子貢・子路という二人の弟子が交替しながら客と対話をする。さらに、『莊子』④子路の行動は『今昔』⑤の弟

42) 赤塚 忠『莊子 下』全釈漢文大系 16(集英社、1982年、初出1977)

子が翁を最初無視した行動につながっており、『今昔』編者が細部を単純化したと言えよう。

また、『莊子』④では孔子について「道から遠くなってしまった」とのべていることに対して、『今昔』④では翁が孔子に「此レ、極タル嗚呼人也」のように直接的に愚かな人という酷評をしている。『莊子』④で「道から遠くなってしまった」という部分とはかなり差が見える。

さらに、『今昔』では翁と孔子の話し合う場面で、『莊子』の重要な筋である八疵と四患の教示を削除している。

『莊子』雑篇「漁父篇」

且つ人には八疵有り、事には四患有り、察せざる可からざるなり。其の事に非ずして之を事とする、之を摠と謂ふ。之を顧みる莫くして之を進むる、之を佞と謂ふ。意を希ひて言を導く、之を諂と謂ふ。是非を択ばずして言ふ、之を諛と謂ふ。好んで人の悪を言ふ、之を讒と謂ふ。…中略…人己に同じければ則ち可とし、己に同じからざれば、善と雖も善しとせざる、之を矜と謂ふ。此れ四患なり。能く八疾を去り、四患を行ふこと無くして、始めて教えふ可きのみ⁴³⁾。

これは、『莊子』の思想の核心になる重要な話であるが、『今昔』編者はあまりにも難しいこの部分を外して、次の例20-2の⑥のような原拠に無い例を添加することで、より近づきやすい話を組み立てた。

43) そのうえに、人には八つの欠点があり、四つの悪い癖があるものであって、このことをよくあきらかにしなければならぬ。自分のすべきことでもないのに、勝手に差し出で行く、これを摠(でしゃばり)という。事情や相手の意向も考えずに巧みに自分の考えを押し付ける、これを佞(口巧者)という。相手の意向を伺って、それに合わせるようにことばを運ぶ、これを諂(へつらい)という。その事の是非を問題せず、ただ相手の気に入るように言う、これを諛(おべっか)という。好き好んで他人の欠点だけを洗い立てる、これを讒(悪口)という。…中略…他人が自分と同じ考えであれば、まあよとして、その人が自分とは違った考えであれば、その人の行いが善であっても、その善を善と認めない、これを矜(思い上がり)という。以上が四つの悪い癖だ。八つの欠点を取り除くことができ、四つの悪い癖を行うことがないようになれば、その人にはじめて教えることができるのだ。

例20-2

| 『莊子』 | 『今昔』 |
|---|---|
| <p>客悽然として容を変へて曰く、「甚し、子の悟り難きや。①人影を畏れ迹を悪みて去りて走る者有り。足を挙ぐること愈々数にして迹愈々多く、走ること愈々疾くして影身を離れず。自ら以て尚遅しと為して、疾く走りて休まず、力を絶ちて死せり。陰に処りて以て影を休め、静に処りて以て迹を息むることを知らず。…中略…</p> <p>孔子愀然として曰く、②「請ひ問ふ、何をか真と謂ふ」と客曰く、「真とは精誠の至りなり。精ならず誠ならざらば、人を動かす能はず。故に強ひて哭する者は、悲しむと雖も哀しみあらず。強ひて怒る者は、厳なりと雖も威あらず。強ひて親しむ者は、笑ふと雖も和せず。真に悲しめば声無くして哀しみ、真に怒れば未だ発せずして威あり、真に親しめば未だ笑はずして和す。真内に在る者は、神外に動く。是れ真を貴ぶ所以なり。</p> | <p>孔子ノ云ク、「己ノレハ世ノ庁ヲ直シ、悪キ事ヲ止メ、善キ事ヲ行ハムガ為ニ罷リ行ク者也」ト。翁ノ云ク、「①其レ、極テ墓無キ事也。世ノ蔭ヲ厭フ人有り。晴ニ出テ、蔭ヲ離レムト走ル時ニハ、蔭ヲ離ルル事無シ。蔭ニ寄テ心静ニ居ナバ蔭ハ可離キニ、然ハ不為ズシテ、晴ニ出デ、離レムト為ル時ニハ、身ノ力コソ尽シドモ、蔭離ルル事無シ。亦、②犬ノ死骸、水ニ流レテ下ル。此レヲ要シテ走ル者有り。即チ、水ニ溺レテ死ヌ。然レバ、此等ノ譬ノ如ク、此レ、極テ益無キ事也。只、③可然キ所ニ居所ヲ示テ、静ニ一生ヲ被送ラレム、此レ、此ノ生ノ望也。而ルニ、其ノ事ヲ不思シテ、心ヲ世世ニ染メテ被騒ルル事、極テ墓無キ事也。</p> |

例20-2①の逸話は『今昔』も『莊子』も共通でしているが、②の話は『莊子』にはない内容として『莊子』に仮託して添加されたエピソードである。また、『今昔』は、二つの逸話(①、②)を「此等ノ譬ノ如ク、此レ、

極テ益無キ事也」のように世の中の解法として㉔「可然キ所ニ居所ヲ示テ、静ニ一生ヲ被送ラレム、此レ、此ノ生ノ望也」と語っているが、これは『莊子』㉔の「真とは精誠の至りなり」という話と主題的にかなり離れたものとなってしまったといえよう。さらに、次の例20-3のように、また『今昔』だけの「三楽」の例が出る。

例20-3

㉔我が身ニハ三ノ楽有り。人ト生タル、此レノ一ノ楽也。人ニ男女有り。而ルニ、男ト生レタル、此レニノ楽也。我レ、今年九十五ニ成ル、此レ三ノ楽也」ト云テ、孔子ノ答ヲ不聞ズシテ、還リ行テ、船ニ乗テ漕ギ出デテ去ヌ。孔子、其ノ漕ギ行ク翁ノ後ヲ見テ、二度ヒ礼シ給フ。船ノ乗り行ク棹ノ音不聞ズ成ルマデ礼ミ入テ居給ヘリ。棹ノ音不聞ズ成ヌル後ニゾ、車ニ乗テ還リ給ヒケル。㉕此ノ翁ノ名ヲバ榮啓期トナム云ヒケルト人ノ語り伝ヘタルトヤ。

例20-3の㉔「我が身ニハ三ノ楽有り」の「三楽」は『莊子』の話ではなく『列子』の「天端」の内容⁴⁴⁾である。また、㉔末尾の「人間で生れたこと、男で生れたこと、九十五歳まで生きていること」は、十10の流れとは似合わない内容である。『今昔』編者が話の流れに不自然な「三楽」の話を入れたのは、二つの理由があると考えられる。まず、上記の例20-2の最後の部分、すなわち「心ヲ世世ニ染メテ被騒ルル事、極テ墓無キ事也」を強調するためであった。次に、『今昔』㉕の翁の名「榮啓期」につながりためであった。「榮啓期」は『列子』の「天端」でこの「三楽」を語る人物であり、十10の中に「三楽説」を引いたところから由来したと考えられる。しかし、例20-3は十10の説話の流れにから見て不自然であり、

44) 注1)の前掲書 317頁の注。

原拠『莊子』から離れてしまう結果を招来するようになった。

例21-1

| 『莊子』雑編「外物」 | 『今昔』十11 |
|--|--|
| <p>莊周、家貧し。故に往きて粟を監河侯に貸る。監河侯曰く、「諾。我れ將に邑金を得んとす。將に子に③三百金を貸さんとす。何ならんか」と。</p> <p>莊周忿然として色を作して曰く、「周、昨来るに、中道にして呼ぶ者あり。周、顧視すれば車轍の中に鮒魚あり。周、これに問ひて曰く、『④鮒魚来れ、子何為る者ぞや』と。對へて曰く、『⑤我れは東海の波臣なり。君、豈に斗升の水ありて、我れを活さんや』と。周曰く、『諾。我れ且に南のかた吳越の王に遊び、西江の水を激して子を迎へんとす。何ならんか』と。鮒魚忿然として色を作して曰く、『吾れ我が常与を失して、我れ処る所なし。吾れ斗升の水を得ば然ち活きんのみ』と。君すなはちこれを言ふは、曾ち早く我れを枯魚の肆に索めに如かず。』</p> | <p>今昔、震旦ノ周ノ代ニ莊子ト云フ人有リ。①心賢クシテ悟リ広シ。家極テ貧クシテ貯フル物無シ。</p> <p>而ル間、今日可食キ物絶ヌ。心ニ思ヒ煩フ間ニ、其ノ隣ニ〔 〕ト云フ人有リ。其ノ人ニ、今日可食キ黄ノ粟ヲ請フニ、〔 〕云ク、「今五日ヲ経テ、我が家ニ②千兩ノ金ヲ得ムトス。其ノ時ノ在マセ。其ノ金ヲ進ラム。何デカ、然カ止事無ク賢ク在マス人ニ、今日食フ許ノ粟ヲバ進ラム。還テ我が為ニ可恥辱シ」ト。</p> <p>莊子ノ云ク、「我レ一日、道ヲ行キシ間ニ、忽ニ後ニ呼ブ音有リ。見還テ見ルニ、呼ブ人無シ。怪シト思テ吉ク見レバ、事ノ輪ノ跡ノ窪ミタル所ニ大キナル鮒一有リ。見レバ、生キテ動キ迷フ。「何ゾノ鮒ニカ有ラム」ト思テ、寄テ吉ク見バ、水少許リ有ル所ニ鮒生キテ動ク。我レ、其ノ鮒ニ問テ云ク、「何ゾノ鮒ノ此ニハ有ルゾ」ト。鮒答テ云ク、「我レハ此レ、③河伯神ノ使トシテ高麗ニ行ク也。我レハ、東ノ海ノ波ノ神也。而ルニ、不意ニ飛ビ誤テ、此ノ窪ミニ落テカクテ有ル也。水少クシテ喉乾テ、我レ既ニ死ナムトス。『我レ</p> |

| | |
|--|--|
| | <p>助ケヨ』ト思テ、君ヲ呼ツル也」ト。</p> <p>我レ云ク、「今三日ヲ経テ、〔 〕ト云フ所ニ遊バムガ為ニ、我レ行ムトス。其ノ所ニ汝ヲ将行テ放タム」ト云ヘバ、鮒ノ云ク、「我レ、更ニ三日ヲ不可ズ。只、今日一滯ノ水ヲ令得テ、先ヅ喉ヲ潤ヘヨ」ト云シカバ、鮒ノ云フニ随テ一滯ノ水ヲ与ヘテナム助ケテシ。然レバ、彼ノ鮒ノ云シガ如ク、④我ガ今日ノ命、物不食ズシテハ更ニ不可生ズ。後ノ千金、益不有ジ」ト云ヒケリ。</p> <p>⑤其ノ後ヨリ、「後ノ千金」ト云フ事ハ如此ク云フ也トナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |
|--|--|

『今昔』④は、人物莊子に対する『今昔』編者の評価であり、原拠『莊子』には勿論、同文的な同話の『宇治拾遺』（例21-2）にもない部分である。それは『今昔』巻十を分類の上で、賢臣譚として使おうとした編者の意図によるものと考えられる。『莊子』⑥と『今昔』⑥を比べて見ると、各々「三百金」と「千両の金」のように差があり、『宇治拾遺』も『今昔』と同じである。このように「千両の金」に変えたのは、『今昔』十11の話末の編者の意図、つまり、この説話を「後の千金」の由来譚とするためである。同文である『今昔』と『宇治拾遺』は当該説話を成語の由来譚として位置づけたともいえよう。

例21-2

今は昔、唐に莊子といふ人ありけり。家いみじう貧しくて、今日の食物絶え

ぬ。隣に監河侯といふ人ありけり。それがもとへ、今日食ふべき料の粟を乞ふ。監河侯曰く、「今五日ありておはせよ。千両の金を得んとす。それを奉らん。いかでかやんごとなき人に、今日参るばかりの粟をば奉らん。返す返すおのが恥なるべし」といへば、莊子の曰く、「昨日道をまかりしに、跡に呼ばふ声あり。顧みれば人なし。ただ車の輪跡のくぼみたる所にたまりたる少水に、鮒一つふためく。何ぞの鮒にかあらんと思ひて、寄りて見れば、少しばかりの水に、いみじう大なる鮒あり。『何ぞの鮒ぞ』と問へば、鮒の曰く、『我は河伯神の使に、江湖へ行くなり。それが飛びそこなひて、この溝に落ち入りたるなり。喉乾き死なんとす。我を助けよと思ひて、呼びつるなり』といふ。答へて曰く、『吾今二三日ありて、江湖もとといふ所に遊しに行かんとす。そこにもて行きて放さん』といふに、魚の曰く、『更にそれ迄え待つまじ。ただ今日一掬ばかりの水をもて、喉をうるへよ』といひしかば、さてなん助けし。鮒のいひし事、我が身に知りぬ。更に今日の命、物食はずは生くべからず。後の千の金更に益なし」とぞいひける。それより、後の千金といふ事名誉せり。

宇治拾遺196⁴⁵⁾

続く『今昔』㉔の後の部分は、『莊子』㉔「東海」の神に関わることは共通しているが、『莊子』では臣下として、『今昔』では神として表現されている。また、『今昔』㉔の前の部分の「河伯神ノ使」は『莊子』にはない部分であるが、『宇治拾遺』の「我は河伯神の使に、江湖へ行くなり。それが飛びそこなひて…」と「河伯神の使」は共通している。「高麗ニ行ク也」のところは、『今昔』時代の対外的背景と関わるものと思われる。

㉔、㉔は『宇治拾遺』の「更に今日の命、物食はずは生くべからず。後の千の金更に益なしとぞいひける。それより、後の千金といふこと名誉せり」と同じ結末で「後の千金」を強調している。しかし、『莊子』には

45) 注37)の前掲書。

「後の千金」はなく、これは「轍鮒の急」という言葉が日本式に変化したものである。例21-1が日本式成語の変化をうかがわせる例であるのに対して、次の一連の例は、『莊子』に対して『今昔』 莊子関連説話が主題的に変化した例である。

例22-1

| 『莊子』外篇「山木」 | 『今昔』十12 |
|---|---|
| <p>莊子山中に行き、大木の枝葉盛茂せるを見る。木を伐るもの、その傍に止まるも、取らざるなり。その故を問へば、曰く、「用ふべき所なし」と。莊子曰く、「この木、不材を以てその天年を終ふるを得たり」と。莊子、山より出でて、故人の家に舍る。故人喜び、豎子に命じて、雁を殺してこれを烹せしむ。豎子請ひて曰く、「その一は能く鳴き、その一は鳴くこと能はず。請ふ、奚れを殺さん」と。主人曰く、「鳴くこと能はざるものを殺せ」と。明日、弟子、莊子に問ひて曰く、「昨日山中の木は、不材を以てその天年を終ふることを得、今主人の雁は、不材を以て死す。先生將に何れに処らんとするや」と。莊子笑つて曰く、「<u>①周は、將に夫の材と不材との間に処らんとす。材と不材との間は、これに以て而して非なり。故に未だ累を免れず。若し夫れ道德に乗じて浮游する者は則ち然らず。譽もなく誹もなく、一竜一</u></p> | <p>今昔、震旦ニ莊子ト云フ人有ケリ。心賢クシテ悟リ広シ。 此ノ人、道ヲ行ク間、一柚山ヲ通ル。而ルニ、柚ノ多ノ木ノ中ニ、鈎リ?ミタル一ノ木有リ。年久ク成レリ。莊子、此ノ木ヲ見テ、柚人ニ問テ云ク、「此ノ木ノ年久ク成ルマデ命ヲ持ツハ何ナル事ゾ」ト。柚人答テ云ク、「柚ニハ吉ク直キ木ヲ撰テ取レバ、此ノ木ハ?ミ鈎レルニ依テ、不用ノ物ニテ材木ニモ不取ザレバ、カク年久ク成タル也」ト。莊子、「然也」ト聞テ、過ヌ。 亦ノ日ニ成テ、莊子、人ノ家ニ行タルニ、家ノ主、饗ヲ儲テ令食ム。先ヅ酒ヲ令呑ムルニ肴ノ無カリケレバ、其ノ家ニ雁ニヲ飼フ。家ノ主、「其ノ雁一ヲ殺シテ御肴ニ備ヘヨ」ト云フニ、其雁ヲ預リテ飼フ人ノ申サク、「吉ク鳴ク雁ヲヤ可殺キ。不鳴ヌ雁ヲヤ可殺キ」ト。主人ノ云ク、「鳴クヲバ生ケテ令鳴シメヨ。不鳴ヌヲ殺シテ御肴ニ可備シ」ト。</p> |

| | |
|--|--|
| <p>蛇、時と俱に化して、肯へて専ら為すことなし。一上一下、和を以て量と為す。万物の祖に浮遊して、物を物として、物に物とせられず。則ち胡ぞ得て累はすべけんや。これ神農黄帝の法則なり。若し夫れ万物の情、人倫の伝は、則ち然らず。合へば則ち離れ、成れば則ち毀たれ、廉は則ち挫かれ、尊は則ち議せられ、為すことあれば則ち虧かれ、賢は則ち謀られ、不肖は則ち欺かる。胡ぞ得て必ずべけんや。悲しいかな。弟子これを志るせ。それただ道德の郷か」と。</p> | <p>主人ノ云クニ随テ、不鳴ヌ雁ノ頸ヲネヂテ、殺シテ調テ、御肴ニ備ヘタリ。</p> <p>其ノ時ニ、莊子ノ云ク、「昨日ノ柚山ノ木ハ不用ナルヲ以テ命ヲ持ツ。今日ノ主人ノ雁ハ才有ヲ以テ命ヲ生ク。此レヲ以テ心得ルニ、賢キ者モ愚ナル者モ、命ヲ持ツ事ハ其レニハ不依ズ、只、自然ラ令然ムル事也。①然レバ、<u>「才有レバ不死ザルゾ。不用ナレバ死ヌルゾ」</u>トモ不可定ズ。不用ノ木モ命長シ。不鳴ヌ雁モ忽ニ死ヌ。此レヲ以テ、<u>諸ノ事ハ可知シ</u>」ト。</p> <p>此レ、莊子言也トナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |
|--|--|

『莊子』①が説いているのは、万物を支配する根本原理としての「道」と一体化して生きること、つまり、一切の人為を廃してすべてをあるまに受け入れ、調和することによって獲得される自然にして自由な生き方の大切さである。

少なくとも『今昔』①「此レヲ以テ、諸ノ事ハ可知シ」のいうような「運命の不条理さ」でないことだけは明瞭であろう。しかも、莊子のこの言葉はこの話の結論として提示されたものである。

例23-1

| 『莊子』外篇「山木」 | 『今昔』13 |
|---|-----------------------------------|
| <p>莊周雕陵の樊に遊ぶ。一異鵲の南方自り来たる者を観る、翼の広さは七</p> | <p>今昔、震旦ニ莊子ト云フ人有ケリ。心賢クシテ悟リ広シ。</p> |

| | |
|---|--|
| <p>尺、目の大きさは運寸、周の額を感かして、④栗林に集る。莊周曰く、「此れ何の鳥ぞや。翼殷いなれども逝かず、目大いなれども覩ず」と。裳を蹇げて躍歩し、弾を執りて之を留かんとす。覩る、一蟬の方に美蔭を得て、其の身を忘れ、螻螂翳を執りて之を搏たんとして、得を見て其の形を忘れ、異鵲従ひて之を利として、利を見て其の真を忘るるを。莊周恍然として曰く、「噫、物は固より相累はし、二類が相召ぶなり」と。弾を損てて反り走る。虞人逐ひて之を諍む。莊周反りて入り、三日庭からず。藺且従ひて之に問ふ、「夫子何為れぞ頃閒甚だ庭からざるや」と。莊周曰く、「吾は形を守らんとして身を忘れてたり。濁水を観て清淵に迷へり。且つ吾諸を夫子に聞く、曰く、『其の俗に入りては、其の俗に従へ』と。今、吾は<u>彫陵に遊びて吾が身を忘れてたり。異鵲吾が額を感かして、栗林に遊びて真を忘れ、栗林の虞人は吾を以て戮と為せり。吾の庭からざる所以なり</u>」と。</p> | <p>此ノ人、道ヲ行ク間、沢ノ中ニ一ノ鷺有テ、者ヲ伺テ立テリ。莊子、此レヲ見テ窃ニ鷺ヲ打ムト思テ、杖ヲ取テ近ク寄ルニ、鷺不逃ズ。莊子、此レヲ怪ムデ、弥ヨ近ク寄テ見レバ、鷺、一ノ蝦ヲ食ムトシテ立テル也ケリ。然レバ、人ノ打ムト為ルヲ不知ザル也ト知ヌ。亦、其ノ鷺ノ食ムト為ル蝦ヲ見レバ、不逃ズシテ有ケリ。此レ亦、一ノ◎小虫ヲ食ムトシテ、鷺ノ伺フヲ不知ズ。其ノ時ニ、莊子、杖ヲ棄テテ、心ノ内ニ思ハク、「<u>鷺・蝦、皆、我レヲ害セムト為ル事ヲ不知ズシテ、各他ヲ害セム事ヲノミ思フ。我レ亦、鷺ヲ打ムト為ルニ、我レニ増サル者有テ、我レヲ害セムト為ルヲ不知ジ。然レバ不如ジ、我レ逃ナム</u>」ト思テ、走り去リヌ。此レ、賢キ事也。人如此キ可思シ。</p> |
|---|--|

卷十13の莊子関連説話は『莊子』の別々の二話が『今昔』では一つの説話として組み立てられた。例23-1はその前話として、『莊子』の「山木篇」にある話である。両話は他の莊子関連説話に比べ、意味の歪曲や物語部に合わない編者の加筆は見られない。まず『莊子』の弱肉強食の

関係を見ると、蟬一螭螂翳一鵲一莊子、『今昔』は、小虫一蝦一鷺一莊子の順になっていて、一応大きいはずはないように見える。しかし、『莊子』では莊子自身が鷺に落ちすぎて栗林に入り、自分を忘れて後、それを悟って怖がるのが話の結末として提示されているが、『今昔』では話末に「此レ、賢キ事也。人如此キ可思シ」と莊子を讃している。

例23-2

| 『莊子』外篇「秋水」 | 『今昔』十13 |
|--|---|
| <p>莊子と恵子と濠梁の上に遊ぶ。</p> <p>㉑ 莊子曰く、「<u>洿魚出で遊ぶこと従容たり。是れ魚の楽しみなり</u>」と。</p> <p>㉒ 恵子曰く、「<u>子は魚に非ず。安くんぞ魚の楽しみを知らん</u>」と。</p> <p>莊子曰く、「<u>子は我に非ず。安くんぞ我の魚の楽しみを知らざるを知らん</u>」と。</p> <p>恵子曰く、「<u>我は子に非ざれば、固より子を知らず。子は固より魚に非ざれば、子の魚の楽しみを知らざるは全し</u>」と。</p> <p>㉓ 莊子曰く、「<u>請ふ其の本に循はん</u>。子曰く、『<u>女安くんぞ魚楽しむを知らん</u>』と云ふ者は、既に已に吾の之を知るを知りて、我に問ひしなり。我之を濠の上に知れり」と。</p> | <p>亦、莊子、妻ト共ニ水ノ上ヲ見ルニ、水ノ上ニ大キナル一ノ魚浮テ遊ブ。㉑ 妻、此レヲ見テ云ク、「<u>此の魚、定メテ心ニ喜ブ事可有シ。極テ遊ブ</u>」ト。㉒ 莊子、此レヲ聞テ云ク、「<u>汝ハ何デ魚ノ心ヲバ知レルゾ</u>」ト。妻答テ云ク、「<u>汝ハ何デ我ガ魚ノ心ヲ知り不知ズバ知レルゾ</u>」ト。其ノ時ニ、㉓ 莊子ノ云ク、「<u>魚ニ非レバ魚ノ心ヲ不知ズ。我レニ非ザレバ我ガ心ヲ不知ズ</u>」ト。此レ、賢キ事也。実ニ親シト云ヘドモ、人、他ノ心ヲ知ル事無シ。</p> <p>然レバ、莊子ハ、妻モ心賢ク悟リ深カリケリナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |

例23-2の『莊子』の寓話は、莊子の浮世離れした趣、万物一体の心境を示しているもので、「濠梁の想」「濠濮の閑想」「濠上の居」などの成語がこれを基にしてできている。『今昔』の話とは似ても似つかぬ論争

が繰り広げられている。まず、人物設定から違っている。『今昔』①は例文のように、「此の魚、定メテ心ニ喜ブ事可有シ。極テ遊ブ」といったのは莊子の妻であるが、それは原拠『莊子』では莊子が友人である恵子に話したものとなっている。また、『今昔』②「汝ハ何デ魚ノ心ヲバ知レルゾ」と反論したのも原拠では莊子の友人で論理学派の恵子である。すなわち、『今昔』編者は莊子と恵子のエピソードを莊子と妻の話に変えたのである。

しかし、『今昔』の話はここでも『莊子』の話の末尾を切り捨てている。『莊子』③の話は「魚でなければ魚の気持はわからない」と自他を厳しく区別し、対立差別を強調する恵子に対して、莊子の万物斉同を唱え自他無差別を主張する彼らしい反論と揶揄が盛り込まれている。そこにこの話の核心があるが、『今昔』の話は③のように原拠の難解な部分を捨てて分かりやすい部分だけで話を組み立て、結局原典とは正反対の思想を展開している。

例24-1

| 『莊子』 雜篇「盜跖」 | 『今昔』 十15 |
|---|--|
| 孔子①柳下季と友為り。柳下季の弟、名は盜跖と曰ふ。②盜跖卒九千人を従へ、天下に横行し、諸候を侵暴し、室 | 今昔、震旦ノ□代ニ①柳下恵ト云フ人有ケリ。②世ノ賢キ人トシテ人ニ重ク被用レタリ。 |
| に穴し戸を枢げ、人の牛馬を駆り、人の婦女を取る。得を貪りて親を忘れ、父母兄弟を顧みず、先祖を祭らず。過ぐる所の邑、大国は城を守り、小国は保に入り、万民之に苦しむ。 | 其ノ弟ニ盜跖ト云フ人有ケリ。③一ノ山ノ懷ヲ棲トシテ、諸ノ悪ク武キ人ヲ多ク招キ集メテ、我ガ具足トシテ、他人ノ物ヲバ善悪ヲ不撰ズ我ガ物トス。遊ビ行ク時ニハ、此ノ悪ク猛キ物共ヲ引き具セル |

| | |
|--|------------------------------------|
| | 事、既ニ二三千也。道ヲ亡シ人ヲ煩シ、諸ノ不吉ヌ事ノ限リヲ好テ業トス。 |
|--|------------------------------------|

例24-1で、『今昔』には、表題に「孔子」の名が明記されたためであろうか、孔子の名前や紹介はまったくない。その代わり、『莊子』①とはその名前に差があるが、『今昔』②の柳下恵が紹介されている。特に、③のような叙述によって、②の人柄が分かり、「盗跖」も普通の盗賊ではないことが推測できる。『莊子』④は「盗跖」の悪行が具体的で詳細に描かれているが、『今昔』⑤は、イメージとして、「盗跖」が悪党であることを示している。

『今昔』の編者は、「盗跖」が悪行をする盗賊であるが、普通の盗賊との差別性を示す目的があったと考えられる。

例24-2

| 『莊子』 雜篇「盗跖」 | 『今昔』 十15 |
|--|--|
| 孔子柳下季に謂ひて曰く、「 <u>⑥夫れ人の父為る者は、必ず能く其の子に詔げ、人の兄為る者は、必ず能く其の弟を教ふ。若し父其の子に詔ぐる事能はず、兄其の弟を教ふる事能はずんば、則ち父子兄弟の親を貴ぶ事無し。今先生は世の才士なり。弟は盗跖為り。天下の害を為せども、而れども教ふる事能はざるなり。丘竊かに先生の為に之を羞づ。丘請ふ先生の為に往きて之に説かん</u> 」と。 | 而ル間、兄ノ柳下恵、道ヲ行ク間ニ、孔子会ヒ給ヌ。孔子、柳下恵ニ語テ云ク、「 <u>①汝ヂ、何レノ所ヘ行クゾ。自ラ面リ申サムト思フ事ノ有ツルニ、幸ニ会ヒ給ヘリ</u> 」ト。柳下恵、「何事ヲ宣ハムト為ルゾ」ト。孔子ノ云ク、「 <u>⑥面リ申サムト思フ事ハ、君ガ御弟ノ盗跖、諸ノ悪キ事ノ限リヲ好ムデ、諸ノ猛ク悪キ輩ヲ招キ集テ伴トシテ、多ノ人ヲ令歎メ世ヲ亡ス。何ゾ君、兄トシテ不教給ザルゾ</u> 」ト。柳下恵答ヘテ云ク、「盗 |

| | |
|--|--|
| <p>柳下季曰く、「先生言ふ、『人の父為る者は、必ず能く其の子に詔げ、人の兄為る者は、必ず能く其の弟を教ふ』と。若し子父の詔を聴かず、弟兄の教へを受けずんば、今先生の弁と雖も、将之を奈何せんや。且つ跖の人と為りや、心は涌泉の如く、意は飄風の如し。強は以て敵を距ぐに足り、弁が以て非を飾ることに足る。其の心に順へば則ち喜び、其の心に逆らへば則ち怒る。人辱しむるに言を以てし易し。先生必ず往くこと無かれ」と。</p> | <p>跖、弟也ト云ヘドモ、我が教ヘニ可随キ者ニ非ズ。然レバ、年来歎キ乍ラ不教ザル也」ト。孔子ノ云ク、「君不教ハ、我レ、彼ノ盗跖ガ所ニ行テ教ヘムト思フ、何ニ」ト。柳下恵答テ云ク、「君、更ニ盗跖ガ所ニ行テ不可教給ズ。君妙ナル御言ヲ尽シテ教ヘ給フト云ヘドモ、更ニ可靡者ニ非ズ。還テ悪キ事出来ナムトス。努々其ノ事不可有ズ」ト。孔子ノ云ク、「悪シト云フトモ、盗跖、人ノ身ヲ受ケタル者ナレバ、自然ラ善キ事ヲ云ハムニ、趣ク事モ有リナム。其レヲ兼ネテ不承引ジト云テ、君、兄トシテ不教ズシテ、不知顔ヲ作テ任セテ見給フハ、極メテ悪キ事也。㊦吉々シ、見給へ。自ラ行テ、教ヘ直シテ見セ進ラム」ト言ヲ吐テ去リ給ヌ。</p> |
| <p>孔子聴かず。㊦顔回馭と為り、子貢右と為り、往きて盗跖を見る。</p> | |

例24-2は、両話がほぼ同じ内容であるが、『今昔』㊦の孔子の会話は原拠にはない。これは『今昔』の説話集的な特性であろう。両話㊦は孔子が柳下恵(季)を訓戒する場面であるが、「莊子」㊦の孔子は弟を教誡しない柳下恵に儒教的な内容で訓戒する。『今昔』㊦は儒教的思想より道徳的な立場で訓戒する孔子を描いている。『今昔』編者は原拠㊦の文章からが難しい思想を取り外し、簡略化することで説話的な一般性を与えた。両話㊦は、15で終始戯画的に描かれた孔子の行動を端的に示しており、後のエピソードで「盗跖」に叱られる孔子の姿につなぐ。

例24-3

| 『莊子』 | 『今昔』 |
|---|---|
| <p>孔子再拝し、趨走して門を出づ。①車に上り轡を執らんとして三たび失し、目は茫然として見る事無く、色は死灰の若く、軾に拠り頭を低れて、気を出すこと能はず。帰りて魯の東門外に到り、適々柳下季に遭ふ。柳下季曰く、「今者闕然として数日見ず。車馬に行色有り。往いて跖を見る微きを得んや」と。孔子天を仰いで歎じて曰く、「然り」と。柳下季曰く、「跖は汝の意に逆らふこと前の若くなる無きを得んや」と。孔子曰く、「然り。丘は所謂病無くして自ら灸するなり。疾走して虎頭を料で、虎須を編つ。幾ど虎口を免れざりしかな」と。</p> | <p>然レバ、汝ガ云フ所、毎事ニ悚也。汝ヂ、速ニ走り還テ去ネ。一トシテ可用キ事無シ」ト云フ時ニ、孔子、亦可云キ事思エ給ハザリケレバ、座ヲ起テ忽ギ出テ給ヌ。</p> <p>①馬ニ乗り給ニ、吉ク恐レ給ヒニケレバ、轡ヲ二度ビ取り□シ、鐙ヲ頻ニ踏ミ誤チ給フ。此レヲ世ノ人、「孔子倒レシ給フ」ト云フ也トナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |

孔子またいふべき事覚えずして、座を立ちて急ぎ出でて、馬に乗り給ふに、よく臆しけるにや、轡を二たび取りはづし、鐙をしきりに踏みはづす。これを世の人、「孔子倒れす」といふなり。

『宇治拾遺』19746)

十15は長い話であるが、大筋は孔子が大盗賊の盗跖の所に行き、反対に論破されて逃げ帰る話である。『今昔』編者は『莊子』①の最も印象的な部分を『今昔』①のように採り、先出の十11(例21-1)の「後の千金」ように日本式成句である「孔子倒れ」の起源と連関づけている。

46) 注35)の前掲書。

また、この話は『宇治拾遺』にも見えることで、共同母胎の段階で既にあったものであろう。『莊子』のように本来、説話集ではないところから説話的部分を抜き取って要約し話として作りなおすということは、内容に多少変容やずれが生じうるだろう。

また、原典の難しい部分や理解しにくい所はなるべく省略して、具体的な行為や事件が語られている部分だけで話を組み立てようとするのも、説話というものの本来的性格からみれば当然のことであるだろう。

2. 『史記』からの素材借用

『今昔』巻十の第一話から第三話までの三つの話群は、部分的な類話が見当たるとのみで、未だ出典が明らかにされてない。しかし、この三つの話群は、中国の秦始皇から始まって、漢高祖、項羽の話が続く。また、この話群の原拠として挙げられるのが、『史記』である。しかし、後述するが、原拠が『史記』ということで、それが直接『今昔』の該当説話に影響を与えたのではない。さらに『史記』のみならず、漢籍を原拠とするすべての説話がそうであろう。ここでは、漢籍を原拠とする『今昔』巻十の説話がどのように受容されたかを明らかにしたい。

例25-1

今昔、震旦ノ秦ノ代ニ、始皇ト云フ国王在ケリ。④智リ賢ク心武クシテ世ヲ政ケレバ、国ノ内ニ不随ヌ者無シ。⑤少シモ我が心ニ違フ者ヲバ、其ノ頸ヲ取り、足・手ヲ切ル。然レバ、③皆人、風ニ靡ク草ノ如キ也。

— 『今昔』巻十1

上の例25-1は、『今昔』十1の書頭の秦始皇の人物評で、始皇の人物柄を④、③のような『今昔』の定型の語句として描写している。さらに、⑤の叙述として始皇の厳しさを表して、『史記』の長い記述を省略させた。

第一話には、『史記』の「秦始皇本紀」が圧縮した形で、載せられている。その構成の方法は、『史記』から有名な素材を取り出して、幾つかのエピソードとして組み立てることであった。すなわち、素材の借用である。本話には左驂馬、高大魚、蓬萊山の不死薬、鹿など始皇に関わる多

くの素材が出てくる。しかし、原拠と比較してみると、その主体の差や時間的な倒置があることに気づく。本話の順番に従って比較してみる。

例25-2は『今昔』には、二世の話が始皇の話で載せている。この理由は、十1の表題「秦始皇、在感楊宮政世語」のように、始皇の話に重点をおいて書いたからであろう。

例25-2

| 『史記』 「秦始皇本紀」 47) | 『今昔』 十1 |
|---|--|
| <p>高、<u>㉑二世</u>怒りて誅其の身に及ばんことを恐れ、乃ち病を謝して朝見せず。二世、<u>㉒白虎</u>が其の<u>㉓左驂馬</u>を齧みて之を殺せりと夢み、心樂しまず、怪しみて占夢に問ふ。卜して曰く、<u>㉔涇水</u>、祟を為す、と。二世、乃ち望夷宮に齋し、涇を祠りて四つの白馬を沈めんと欲す。</p> <p>使をして高を責讓せしむるに、盜賊の事を以てす。高懼れ、乃ち陰かに其の壻感陽の令閻樂・其の弟趙成と謀りて曰く、上、諫を聞かず。今事急なり。禍を吾が宗に歸せんと欲す。</p> | <p>而ル間、<u>㉑始皇</u>ノ昼夜ニ寵愛スルーノ馬有リ。名ヲ<u>㉒左驂馬</u>ト云フ。此ノ馬ノ体、<u>㉓童</u>ニ不異ズ。此レヲ朝暮ニ愛シ飼フ間ニ、始皇ノ夢ニ、此ノ左驂馬ヲ海ニ将行テ洗フ間ニ、<u>㉔'高大魚</u>ト云フ大ナル魚、俄ニ大海ヨリ出来テ、左驂馬ヲ食テ海ニ曳入レツト見テ、夢覺ヌ。始皇、心ノ内ニ極テ怪ヒ思フ事無限シ。「何ゾ我が財トシテ愛シ飼フ馬ヲ、高大魚ノ可食キゾ」ト嗔ノ心ヲ発シテ、国ノ内ニ宣旨ヲ下シテ云ク、「大海ニ高大魚ト云フ大魚有リ。其ノ魚ヲ射殺シタラム人ニハ申サム所ノ賞ヲ可給シ」ト。其ノ時ニ、国ノ人、此ノ宣旨ヲ聞テ各大海ニ行テ、船ニ乗テ遙ニ息ニ漕ぎ出テ、高大魚ヲ伺ヒ見ルニ、鬚ニ高大魚ヲ見ルト云ヘドモ、射ル事ヲ不得ズ。然レバ、返テ王ニ申シテ云ク、「大海ニ臨テ高大魚ヲ見ルト云ヘドモ、射ル事ヲ不得。此レ、<u>㉕童王</u>ノ為ニ被妨ルルガ故也」ト。</p> |

本話は「左驂馬」という素材を『史記』から取り出して、原拠と似ているようで異なるエピソードに組み立てた。まず、最初に違いが目立つところは、夢を見る主体である。すなわち『今昔』㉔始皇と『史記』㉔二世という異なる人物が、㉔「左驂馬」を共通の素材としている。また、夢の中で左驂馬を害する存在として、『今昔』㉔は竜、『史記』㉔は白虎を示している。さらに現実で指名されたのは『今昔』㉔'の「高大魚」と『史記』㉔'の「涇水の祟」である。『今昔』㉔'は後のエピソードにつながる重要な素材として使われており、本話の中で話の筋展開を担っている。

次の例は、始皇の逸話の中で最も有名である「蓬莱の不死の薬」の話である。また、『今昔』の側面で見ると、前例25-2の「高大魚」の延長ともいえる。

例25-3

| 『史記』 | 『今昔』 |
|---|---|
| <p>還りて呉を過ぎ、江乗より渡り、海上に竝ひ、北のかた琅邪に至る。㉔方士徐市等、海に入りて神薬を求め、数歳なれども得ず。費多し。譴められんことを恐れ、乃ち詐りて曰く、㉔蓬莱の薬、得可し。然れども常に㉔大鯨魚に苦しめらる。故に至ることを得ざりき。願はくは善く射るものを請ひて與に俱にせん。見はれなば、則ち連弩を以て之を射ん、と。㉔始皇夢に海神と戦ひ、人の</p> | <p>始皇、此ノ事ヲ聞テ後、先ヅ、我が身ノ恐レヲ除カムガ為ニ、㉔方士ト云フ人ニ仰セテ云ク、「汝ヂ、速ニ㉔蓬莱ノ山ニ行テ不死薬ト云フ薬ヲ取テ可来シ。蓬莱は未ダ不見ザル所也ト云ヘドモ、昔ヨリ今ニ至ルマデ、世ニ云ヒ伝ル事有リ。早ク可行シ」ト。方士、此ノ旨ヲ蒙テ、忽ニ蓬莱ニ行ヌ。其ノ後チ、還リ来ル相侍ツ間ニ、数月ヲ経テ還リ来テ、王ニ申テ云ク、「蓬莱ニ行</p> |

47) 吉田賢抗 『史記(一)』新釈漢文大系38 (明治書院、1985年、初出1978)

| | |
|--|---|
| <p>壯の如し。占夢博士に問ふ。曰く、水神は見る可からず。大魚蛟竜を以て候と為す。今、上、禱祠備はり謹めり。而るに此の悪神有り、當に除き去るべし。而して善神、致す可し、と。乃ち大海に入る者をして巨魚を捕ふる具を齋さしめ、而して自ら連弩を以て大魚の出づるを候ひ之を射んとす。琅邪より北のかた栄成山に至る。見えず。之罘に至りて、巨魚を見る。㉔射て一魚を殺す。㉕遂に海に竝ひて西のかた平原津に至りて病む。始皇、死を言ふことを悪む。羣臣、敢て死の事を言ふもの莫し。上、病益々甚だし。乃ち璽書を為り、公子扶蘇に賜ひて曰く、喪と感陽に會して葬れ、と。書は已に封じて、中車府令趙高が符璽の事を行ふ所に在り。未だ使者に授けず。七月丙寅、始皇、沙丘の平臺に崩ず。</p> | <p>ム事ハ易カリヌブシ。然レドモ大海ニ㉔高大魚ト云フ大ナル魚有り。此レニ恐レニ依テ蓬莱ニ不可行着ズ」ト。始皇、此ノ事ヲ聞テ云ク、「彼ノ高大魚、我が為ニ旁ニ付テ悪ヲ致セル也。然レバ猶、彼ノ魚ヲ可射殺シ」ト宣フ下スト云ヘドモ、人行テ射ル事更ニ無シ。其ノ時、始皇ノ云ク、「我レ、速ニ大海ニ行テ、自ラ高大魚ヲ見テ可射殺キ也」ト云テ、忽〔 〕彼ノ所ニ行キ、始皇自ラ船ニ乗テ、遥ニ大海〔 〕見ル事ヲ得タリ。㉔即チ、始皇喜テ、此レヲ射ルニ、魚、箭ニ当テ死ヌ。始皇、喜ビヲ成シテ還ル間ニ、㉕天ノ責メヲ蒙ニケルニヤ、〔 〕云フ所ニシテ身ニ重キ病ヲ受タリ。</p> |
|--|---|

㉔から㉕までの展開は『今昔』と『史記』が同じ筋で語られていることをうかがわせる。勿論、展開は同じであるが、差は存在する。『今昔』㉔と『史記』㉔は両方「方士」を指しているが、『今昔』にはその名が省略されている。これは、伝承の過程で消えた可能性もあるし、説話の特性である単純化を目指した編者の意図的な作業かもしれない。『史記』㉔には、始皇が海神と戦う夢として、㉔「大鯨魚」が水の神と関係していることが語られているが、『今昔』は例25-2㉔で、「高大魚」が竜王と関係があることを示している。先述したように、この「高大魚」は「左驂馬」、

「蓬萊の不死の薬」と①「始皇の病」にまでつながる。『今昔』の編者は一つの素材「高大魚」を以て、始皇にまつわるエピソードに作り替え、また一つの説話として組み立てている。

前述したように、『今昔』十1は多くのエピソードで組み立てられている。しかし、『今昔』の先代説話集(物語集を含む)の中で、その類話は極めて少ない。さらに、『今昔』巻十の出典として言及された『俊頼髓脳』や『注好選』などと共通している部分的類話も未だ明らかではない。次に引用する例は、『俊頼髓脳』に載せられている部分的な類話と見なされる部分で、前章で『俊頼髓脳』について述べたように、歌の由来譚として載せられた物語である。

例25-4

| | |
|--------|---|
| 『史記』 | <p>八月己亥、<u>①趙高</u>、乱を為さんと欲す。<u>②羣臣</u>の聴かざらんことを恐れ、乃ち先づ<u>駘</u>を設け、鹿を持ちて<u>③二世</u>に獻じて曰く、馬なり、と。二世笑ひて曰く、丞相誤れるか。<u>④鹿</u>を謂ひて馬と為す、と。左右に問ふ。左右或は黙し、或は馬と言ひ、以て趙高に阿り順ふ。或は鹿と言ふ〔者あり〕。高困りて陰に諸々の鹿と言ひし者に中つるに法を以てす。後羣臣皆高を畏る。高、前に数々言へり、関東の盜は、能く為す母きなり、と。</p> |
| 『俊頼髓脳』 | <p>鹿をさして馬といひける人もあれば鴨をも鴛とおもふなるべし 返し たしといへば惜しむかもと思ふらむ鹿や馬とぞいふべかりける</p> <p>これは、拾遺抄の歌なり。はしに、隱題の所に、おろおろ申したり。この歌は、むかし、秦の世に、<u>③二世</u>と聞ゆるみかどおはしけり。そのみかどの、父の王にも似ず、愚かになむおはしける。時の大臣、みかどの愚かにおはするけしきをみて、国を奪はむ心ありけ</p> |

| | |
|------|---|
| | <p>る。さは思ひながら、<u>⑥人の心を知らずして、おぼつかなさに、たれが方にか寄りたると、心みむとて、ししを、帝王のお前にゐて参りて、「かかる馬になむ侍る」と奏しけり。みかどあやしみて「これは鹿なり。またく馬にあらず」</u><u>①趙高申さく「④まさしく馬なり。あまたの人に、問はせ給ふべし」、人々いな申さく「鹿にあらず。馬なり」と申す。「人の、我がかたに寄るなり。王位をば奪ひたてまつりけり」とぞ言へる。</u></p> |
| 『今昔』 | <p>其ノ後、<u>③二生</u>、位ニ即ヌ。大臣<u>①超高</u>ト云合セテ、諸ノ事ヲ政ツ。而ル間、此ノ国王ノ思ハク、「我ガ父始皇ハ国ノ内ノ事ヲ恣ニシテ、諸ノ事ヲ心ニ任セ給ヘリキ。我モ亦、父ノ如クニ有タム」ト思テ、世ヲ政ツ間ニ、大臣<u>超高</u>ト中違ヌ。超高ノ思ハク、「此ノ国王、始皇ノ子ニ有レドモ、未ダ位ニシテ不久ズ。浅キソラ猶シ如此シ。況ヤ位ニテ年来ヲ経ナバ、当ニ我ガ為ニ吉キ事不有ジ」ト思テ、忽ニ謀反ノ心ヲ発ス。但シ、<u>⑥世ノ人ノ心ヲ不知ネバ、極テ不審ク思ケレバ、人ノ心ヲ試ムト思テ、鹿一頭ヲ国王ノ御前ニ将参テ、「④此ル馬コソ候へ」</u>ト奏シケレバ、国王、此ヲ見テ、「此ハ鹿ト云フ獸也。馬ニハ非ズ」ト宣□バ、<u>超高</u>申サク、「此レハ□馬也。世ノ人ニ令問メ可給キ也」。然レバ、国王、世ノ人ニ問給フニ、此レヲ見ル人、皆「此レハ鹿ニ非ズ、馬也」ト申シケレバ、其ノ時ニ<u>超高</u>思ハク、「早ウ、世ノ人ハ皆我が方ニ寄レル也ケリ。謀反ヲ発サムニ憚リ不可有ズ」ト心得テ、<u>⑤窃ニ多ノ軍ヲ調へ発シテ、隙ヲ伺ヒ短ヲ量テ、王宮ニ入テ国王ヲ責ムトス。</u></p> |

まず、表面的に目立つところから指摘すると、人物の名の差である。

『俊頼髓脳』①、③が『史記』①、③と同じ人物名で叙述されていることに対して、『今昔』は趙高の名前を①超高、二世の名を③二生と表している。それは、同じ発音による誤記と考えられる。

これに反して、㉑と㉒のところは三つの例ともに、共通している。特に、各々の㉑はほぼ同じ内容であるが、『俊頼髓脳』㉑と『今昔』㉑は「人の心を知らず」という語句で非常に似ている。この語句だけで、第一話のこのエピソードが『俊頼髓脳』を出典としたと断定はできないが、これは看過できない点である。

『今昔』㉑は『俊頼髓脳』にはない部分で、例25-4『史記』には上の引用部分はないが、『史記』にある話である。ところで、この部分で『史記』から『今昔』への大きな変容が見られる。『史記』で㉑趙高が謀反を起こすのは、例1-2『史記』の「白虎」の話の後の話である。『今昔』の編者は、先代説話集の影響を受けただけでなく、自らいくつかの有名なエピソードを集め、それを組み立て、新しい話を作りあげたといえる。

例26-1

| 『史記』 「高祖本紀」 | 『今昔』 十2 |
|--|---|
| <p>高祖は、沛の豊邑中陽里の人なり。姓は劉氏、字は季。㉑父を太公と曰い、母を劉媪と曰う。其の先、劉媪、嘗て大沢の陂に息い、夢に神と遇う。是の時雷電して晦冥なり。太公往きて視れば、則ち蛟竜を其の上に見る。已にして身める有り。遂に高祖を産む。</p> | <p>今昔、震旦ニ漢ノ高祖ト云フ人有ケリ。㉑此ノ人ノ母、本、下姓ノ人也。父ハ竜王也。高祖ノ母、昔シ道ヲ行ケルニ、池ノ堤ヲ過ル間ニ、俄ニ電震有テ、暗キ事闇ノ如シ。母、此レニ恐レテ、堤ニ低シ臥ヌ。雷、忽ニ女ノ上ニ落チ係テ女ヲ犯シツ。其ノ後、女、懐妊シテ男子ヲ産セリ。㉒其ノ後、亦、女子ヲ産セリ。</p> |

例26-1は高祖の出生の話である。両話は高祖と竜との関係についての

記述を共通しているが、その詳細は次のような差が見える。『史記』①では高祖の親父である太公がおりて、母と蛟竜との間で高祖が生れたこととなっているが、『今昔』②では、高祖の父が竜王であると直接言及している。すなわち、編者は高祖と竜との結び付きを一般化して『今昔』説話に適用させている。『史記』が、史書の性格を持って高祖と竜との関係を表しているのに対して、『今昔』はあくまで説話集としての性格を持って高祖と竜との関係を表している。これは原話から素材を借用した変容であると考えられる。また、『今昔』③に高祖の妹の出生を記しているが、妹の父については語られていない。

例26-2

| 『史記』 「高祖本紀」 | 『今昔』 十2 |
|---|--|
| <p>高祖、亭長たる時、常て告帰して田に行く。呂后両子与に田中に居りて耨る。①一老父有り、過りて飲を請ふ。呂后因って之に浦す。②老父、呂后を相して曰く、夫人は天下の貴人なり、と。両子を相せしむ。孝恵をみて曰く、夫人の貴き所以は、乃ち此の男あればなり、と。魯元の相するに、亦、皆貴しといふ。老父已に去る。高祖、適適幕舎より来る。呂后具に言ふ、客過る有り、我が子母を相し、皆大いに貴し、と。</p> | <p>其ノ男子、年来ヲ経テ、成長ズルニ、其ノ母自ラ田ニ下テ田ヲ殖フル時ニ、一人ノ老人、其ノ辺ヲ過グ。③老人、田殖ル女ヲ見テ云ク、「④汝ヂ、殊ニ勝レタル相有り。必ズ国母ト可成キ也」ト。女答テ云ク、「我レ、更ニ其ノ相不可有ラズ。我レハ、貧賤・下姓ノ人也。何ゾ国母ノ相有ラムヤ」ト。其ノ時ニ、女ノ男女ノ二人ノ子出来ヌ。老人、亦、⑤「此ノ二人ノ子ヲ見テ云ク、「汝ヂ、此ノ二人ノ子ノ故ニ国母ノ相ヲ備ヘタル也ケリ。兄ノ男子ハ必ズ国王ト可成シ。弟ノ女子ハ后ト可成シ」ト云テ、去ヌ。兄ノ男子ト云ハ、漢ノ高祖ト云フ、此レ也。弟ノ女子ト云ハ、〔</p> |

| | |
|--|-----------|
| | ト云フ后、此レ也。 |
|--|-----------|

例26-2は原拠『史記』の変容の例といえるが、『今昔』編者は上の例25のように、原拠から素材を借用し、なじみの素材で原拠と似ているように異なる新しい説話に作りかえた。すなわち、①の老人の予言者としての役割は両話が共通しているが、『史記』①では、予言を受ける者が呂后・孝恵・魯元で明らかに名が示されているが、『今昔』①では予言をうける者が高祖の母になっている。さらに、①'では「兄ノ男子ト云ハ、漢ノ高祖ト云フ」となっている。この例も、よく知られている素材を借用して、その説話の系統をひきながら変容した例といえよう。

例26-3

| 『史記』 「高祖本紀」 | 『今昔』 十2 |
|--|---|
| <p>① 秦の始皇帝常に曰く、東南に天子の氣有り、と。是に於て困って東游して以て之を厭せんとす。高祖即ち自ら疑い、亡匿し、芒碭の山沢巖石間に隠る。呂后、人と俱に求めて常に之を得たり。高祖怪しみて之を問う。② 呂后曰く、季の居る所の上に、常に雲氣有り。故に従い行き常に季を得あり、と。高祖、心に喜ぶ。沛中の子弟、或いは之を聞き、附かんと欲する者多し。</p> | <p>而ル間、高祖、此レ事ヲ聞テ老人ノ相ヲ憑テ、心ノ内ニ国王ト可成キ思ヒヲ係タリ。世ノ人ニ被知ル事無シテ、芒碭山ト云フ山ニ隱居タリ。而ルニ、① 秦ノ始皇ノ代ニ、五色ノ雲、常ニ彼ノ芒碭山ニ立懸ル。始皇、此レヲ見テ怪テ思ハク、「我レコソ天下ノ一人トシテ世ヲ随ヘタルニ、亦、何ナル者ノ彼ノ山ニ棲ニ依テ、常ニ五色ノ雲ハ立懸ルゾ」ト疑テ、人ヲ遣テ宣下シテ云ク、「彼ノ芒碭山ニ常ニ五色ノ雲有り。慥ニ行テ、此ヲ見テ、人有ラバ可殺シ」ト。勅ニ依テ人行テ、此レヲ尋ネ求ムル事数度也。然レドモ、高祖逃テ去ツツ、</p> |

| | |
|--|---|
| | 被罰ル事無シ。芒峴山ニ⑥' 高祖ノ隠レ居タリケル木ノ上ニハ、常ニ五綵ノ竜王ナム現ジケルトナム語り伝ヘタルトヤ。 |
|--|---|

例26-3は、高祖が秦始皇の次の天帝になる象徴を語っているところや芒峴(峴)など、素材としてみれば、変容がないようににみられるが、両話の⑥を比較すれば『今昔』は「五色ノ雲」ように日本化されて表現となっている。また、『史記』⑥では呂後の語っている話を『今昔』⑥'では編者が語っている。さらに⑥'の「五綵ノ竜王」は上記⑥の「五色ノ雲」と結び付けられている。

例27-1

| 史記「高祖本紀」 | 『今昔』13 |
|--|--|
| 高祖、酒を被り、夜、沢中を徑し、一人をして行前せしむ。行前する者還りて報じて曰く、前に大蛇あり、徑を当る。願はくは還れ、と。高祖酔ひて曰く、壯士行く、何ぞ畏れん、と。乃ち前みて劍を抜き、撃ちて蛇を斬る。蛇遂に分れて兩と為る。徑開く。行くこと數里、酔ひて因って臥す。後るる人來り、蛇の所に至る。一老嫗有り、夜哭す。人問ふ、何ぞ哭す、と。嫗曰く、人、吾が子を殺しぬ、故に之を伏す、と。人曰く、嫗の子、何為れぞ殺されたる、と。嫗曰 | 而ル間、高祖、感陽宮ニ籠リ居□軍□調へて、項羽を罰ムト思フ心有テ、張良・会・陳平等ト議シテ既ニ出立ツ。其ノ道ニ、白キ蛇値タリ。高祖、此レヲ見テ、速ニ令切殺メツ。其ノ時ニ、一人ノ老嫗出来テ、白蛇ヲ殺スヲ見テ、泣テ云ク、「白竜ノ子、赤竜ノ子ノ為被殺レヌ」ト。此レヲ聞ク人、皆、高祖ハ赤竜ノ子也ケリト云フ事知ニケリ。(以下欠) |

| | |
|---|--|
| く、吾が子は白帝の子なり。化して蛇と為り道に当れり。今、赤帝の子に斬られぬ。故に伏す、と。人乃ち嫗を以て誠ならずと為し、之を答たんと欲す。嫗因つて忽ち見えず。後るる人至る。高祖覚む。後るる人、高祖に告ぐ。高祖乃ち心に喜び自ら負む。諸々の従ふ者、日に益々之を畏る。 | |
|---|--|

両話は高祖が蛇を斬り、高祖が赤帝(竜)であるという内容のものである。『今昔』十3は高祖と項羽の話であり、白竜の子が項羽として記されている。しかし、本来この故事は高祖と秦始皇にまつわる話である。すなわち、『史記』で殺された「白帝の子」は秦始皇であり、「赤帝の子」は高祖である。『今昔』の編者はこの『史記』の素材を借りて「白竜の子」と「赤竜の子」と変容した。

『今昔』巻十の最初の三話は『史記』から素材を借り、『今昔』編者が変容して日本化し新しい震旦説話として組み立てた。しかし、『史記』を原拠とする三話において、素材の借用はあったが、他例の説話のような主題変化は表われていない。『今昔』の特徴ともいえる話末語評もない。特に十3の場合は『今昔』典型の結びである「トナム語り伝へタルトヤ」さえない。その理由ははっきりとはいえない。ただ、本巻の話がいちおう集められ、省略された話を後で入れようとしたが、結局、結語までに至らずに終わったのではないかと思われる。

3. 『春秋左氏伝』と『蒙求』の関わり

この章では『今昔』巻十の説話の中で、前章で扱った『莊子』と『史記』以外に、原拠が明らかになっている説話をその原拠の漢籍と比較分析してみたい。そして漢籍『蒙求』の場合、Ⅱ.2においてふれたが、この章では『蒙求』と『今昔』巻十との共通話を中心にその受容関係を具体的に検討する。

(1) 『春秋左氏伝』からの発展

本来『春秋』は魯の隠公元年(b.c.722)から哀公14年(b.c.481)まで242年間の魯の歴史書を孔子が改めて修正し編纂したものであり、またそれに左丘明が注釈を付けたものが『春秋左氏伝』である。『今昔』巻十に『春秋左氏伝』にまつわる説話は一話(十23)だけであり、成語「病、膏肓に入る」の起源譚として載せられている。

例28-1

| 『春秋左氏伝』成公(上) ⁴⁸⁾ | 『今昔』十23 |
|---|--|
| <p>① 晉侯、夢に、大厲、髪を被りて地に及び、膺を打ちて踊りて曰く、「余が孫を殺すこと不義なり。余、帝に請ふことを得たり」と。大門と寝門とを壊りて入る。公、懼れて室に入る。又、戸を壊る。公、覚めて、桑田の巫を召す。巫の言ふこと夢の如し。公曰く、「何如に</p> | <p>今昔、震旦ノ□代ニ、② 身ニ重キ病ヲ受タル人有ケリ。其ノ時ニ、止事無キ医者有ケリ。彼ノ病ヲ受タル人、病ヲ令療治メムガ為ニ、其ノ医者ヲ請ズルニ、医者、既ニ請ヲ受ケツ。 ③ 医者、其ノ夜ノ夢ニ、彼ノ病、忽ニ二人ノ童ノ形ニ成テ歎テ云ク、「我</p> |

| | |
|--|--|
| <p>せん」曰く、「新を食はず」と。㉑' 公、疾病なり。医を秦に求む。秦伯、医緩をして之を為めしむ。未だ至らざるに、㉒公、夢に、疾、二豎子と為りて曰く、「彼は良医なり。懼らくが我を傷らん。焉にか之を逃れん」と。其の一曰く、「㉓盲の上、膏の下に居らば、我を若何にせん」医至りて曰く、「㉔疾為む可からざるなり。盲の上、膏の下に在り。之を攻むるも可ならず、之に達せんとするも及ばず、薬も至らず。為む可からざるなり」と。公曰く、「良医なり」と。厚く之が礼を為して之を帰す。</p> | <p>等、此ノ医者ノ為ニ被傷レナムトス。何が可為キ。何所ニカ逃ゲム為ル」ト云フニ、一人ノ童ノ云ク、「㉓我等、盲ノ上、膏ノ下ニ入ナバ、医者、何ゾ我等ヲ傷ムヤ」ト云フト見テ、夢覚ヌ。其ノ後、医者、彼ノ病スル人ノ許に至テ、病を見て云ク、「㉔我レ、此ノ病ヲ不可治ズ。針モ不可至ズ、薬モ不可及ズ」ト云テ、不治ズシテ返ヌレバ、病者、即チ死ヌ。㉕胆ノ下ヲバ盲ト云ヒ、胆ノ上ヲバ膏ト云フ也。然レバ、其ノ所ニ至ヌル病ヲバ、治ノ無ケレバ如此ク云フナルベシ。</p> |
|--|--|

『今昔』十23の説話は二つの部分に分かれており、『左氏伝』と共通話になっているのは、例28-1の部分である。『左氏伝』では、㉑の晉侯が死んだ人に恨まれる夢を見て、病気になる。病気になってから、また、㉒のように豎子(童)二人が出てくる夢を見る。しかし、『今昔』では、㉑病気にかかった人と㉒童の夢を見る医者が登場する。勿論、『左氏伝』の中でも医者は出て、㉑晉侯の病気を当てる役割(㉓)をする。『今昔』の主人公医者は夢で童の話聞いて病気を分かるが、『左氏伝』の場合は、医者による現夢はない。しかし、両話㉔をみると、医者は全く同じ事を患者に話している。ここまで両話を比較すると、話の筋が非常に似ており、登場人物も同じであるが、『史記』の例のように、登場人物においてずれが生じている。

一方、『今昔』の編者は㉕のように注釈をつけて、この病気の厳しさを説

48) 竹内照夫『春秋左氏伝 中』全釈漢文大系5 (集英社、1982年、初出1972)

明しながら、病人が死んだ理由を正当化しているが、実際、病人が㉔「晉侯」のように病気にかった理由は説明していない。

例28-1では、『史記』の例のように素材の借用があり、その素材で似ているようで異なる説話を組み立てた。しかし、十23の後の部分ではまた違う形の変容が行われている。

例28-2

| 『春秋左氏伝』 | 『今昔』十23 |
|--|--|
| <p>六月丙午、晉侯、麦を欲す。甸人をし て麦を献ぜしむ。饋人之を為む。桑田 の巫を召し、示して之を殺す。將に食 はんとす。張す。廁に如く。陥りて卒 す。小臣、晨に、公を負ひて以て天に 登ると夢ることと有るも、日中に及びて晉 侯を負ひて諸を廁より出す。遂に以て殉 と為す。</p> | <p>其ノ後、㉔亦、重キ病ヲ受タル人有 リ。同ジ医者ヲ請ジテ、病ヲ令療治メム ト為ルニ、医者、請ヲ受テ病者ノ許ヘ 行ク道ニ、㉕忽チ二人ノ鬼有テ歎テ云 ク、「我等、遂ニ此ノ医者ノ為ニ被傷 レナムトス。何が可為キ」ト云フニ、 亦、前キト夢ニ云ヒシガ如ク、「㉖我 等、盲ノ上、膏ノ下ニ入ナバ、更ニ力 不及ジ」ト云フ。亦、一人ガ云ク、 「㉗若シ、八毒丸ヤ令服メムズラム」 ト云ヘバ、今一人ガ云ク、「其ノ時ニ コソ我等術無カラメ」ト云フヲ聞テ、医 者、病スル人ノ所ニ忽ギ行テ、此ノ度 ハ八毒丸ヲ令服ツ。病者、此レヲ服シ テ、病、即チ愈ヌ。 然レバ、病モ皆心有テ、如此ク云フ也 ケリナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |

例28-2は例28-1の後日譚ともいえるが、両話の展開は全く異なる。『左

氏伝』は㉑晉侯の最後の話であるが、十23はまた、例28-1のようので㉑—㉒—㉓の順に話が展開されるが、結局㉔の解決法まで「二人ノ鬼(童)」が語られる。編者は、既にあった話に別の話をその後日譚としてつけて、新しい説話を組み立てた。しかし、㉔「八毒丸」と関連して『今昔』の中でもその例が見られず、未だ明確にされていない。

(2) 『蒙求』の簡略化

『今昔』の説話と『蒙求』との直接交渉を認めるのは困難であるが、『今昔』編者が取材選択において、『蒙求』を参考にしたことは否定できない。というのは、Ⅱ.2で触れた『注好選』との関係からもある程度証明されるし、また震旦部以外の本朝部にも『蒙求』翻案と見られる説話⁴⁹⁾が存在しているからである。

例29-1

| 『蒙求』 「文君当壚」 | 『今昔』 十26 |
|---|---|
| <p>前漢の㉑卓文君は蜀郡臨邛の富人卓王孫の女なり。新たに寡となる。音を好む。司馬相如客と其の家に至る。酒酣にして琴を鼓し、琴心を以て之を挑む。相如、車騎を従へ、雍容閑雅にして、甚だ都なり。㉒文君窃かに戸より之を窺ひ、心に悦びて之を好し、当たるを得ざらんことを恐れ、夜亡げて相如に奔</p> | <p>今昔、震旦ノ漢ノ代ニ文君ト云フ女有ケリ。㉑形端正ナル事、世ニ無並シ。国王ニ仕フルニ、此レヲ寵愛シ給フ事無限シ。亦、見ル人モ文君ヲ見テ不讚ズト云フ事無シ。然レバ、㉒'文君ヲ妻トセムガ為ニ仮惜スル人、世ニ多カリト云ヘドモ、未ダ若キ程ニテ、男ニ触フレバフ事無クシテ禁中ニ有リ。其ノ時</p> |

49) 卷二十九29、卷三十四、卷三十一-21の三説話。

| | |
|---|---|
| <p>る。相如与に馳せて成都に帰る。家徒四壁立つのみ。㉔王孫大いに怒る。文君久しうして楽しまず。長卿に謂って曰く、第俱に臨邛に如き、混弟に従って暇賁せば猶ほ以て生を為すに足らん、と。㉕乃ち臨邛に之き、尽く車騎を売り、酒舎を買ひ、文君をして壚に当たらしめ、相如自ら犢鼻褌を著け、庸保と雑作し、器を市中に滌ふ。王孫之を恥ぢ、門を杜ちて出でず。混弟諸公更更王孫に謂って曰く、一男両女有るのみ。足らざる所の者は財に非ず。今文君既に身を長卿に失す。長卿故倦游、貧して雖も其の人材依るに足れり、と。㉖王孫、文君に僮百人・錢百万を分かち与ふ。成都に帰り、田宅を買ひ富人と為る。久しうして蜀人得意狗監となり、武帝に侍す。帝、子虚の賦を讀んで之を善しとして曰く、朕独り此の人と時を同じうするを得ざりしか、と。得意曰く、臣が邑人司馬相如自ら言ふ、此の賦を為る、と。上驚き召し問うて以て郎と為す。</p> | <p>ニ、相如ト云フ男有リ。年若クシテ形美麗也。亦、箏ヲナム世ニ無並ク弾ケル。此ヲ聞ク人不感ズト云フ事無シ。而ル間、相如、簾ノ外ニテ箏ヲ弾クニ、文君、簾ノ内ニ有テ此レヲ聞クニ、哀ニ目出タキ事無限シ。感ニ不堪シテ、終夜不寢シテ此ヲ聞ク。相如モ此レヲ知テ、手ヲ出シテ箏ヲ弾ク。暁ニ成ル程ニ、㉗文君、此レヲ聞クニ、身ニ染レ哀レニ思ケレバ、簾ノ外ニ出デテ、相如ニ会ヌ。相如、年来文君ニ心ヲ係タル間、カク会ヌレバ、喜ブ心無限クシテ、文君ヲ搔キ抱テ、蜜ニ出ヌ。家ニ将行テ、永ク契ヲ成シテ棲ム程ニ、世ニ此ノ事不聞ズ。然レバ、㉘文君ガ父、文君既ニ失ニタリテ、東西南北ヲ騒ギ求ムト云ヘドモ、求メ得ル事無シ。其ノ後二年ヲ経テ、㉙文君ノ父、遂ニ此ノ事ヲ聞キツ。喜ビヲ成シテ、衾并ニ錢三万ヲナム送り遣リケル。文君、感ニ不堪ズシテ身ヲ棄テテ出デテ会ケム、何許ナリケムトゾ、其ノ此人云ヒケルトナム語り伝ヘタルトヤ。</p> |
|---|---|

『蒙求』も『今昔』も登場人物は殆んど同じであるが、文君についての事項に違いがある。文君は、『蒙求』には㉔ヤモメと描かれているが、『今昔』には、㉔のように「王に寵愛される姿」として㉔'のように「男に触られたことない姿」として描写されている。㉔も㉔'も『蒙求』とはわずかな差が見える部分である。

両話の⑥は文君が相如と家を出る場面で同じ形の展開をしている、しかし、『蒙求』③では父王孫が激怒するが、『今昔』では娘を心配する姿で語られている。そして、④は『蒙求』では表題になる重要な部分であるが、『今昔』にはなく削除された。両話の⑤も父に再会して財産をもらう設定は同じであるが、⑤以降にまた変容の姿が見える。『蒙求』では夫の相如が薦挙により武帝に採用される話が続いてくるが、『今昔』ではこの部分も削除され、編者の話末評がつづく。『今昔』の編者は立身出世の話を省略することによって、哀れを主題としたものに変えたのである。さて、『今昔』と同じ時期の『唐物語』の説話は如何なる形で展開しているのか。

例29-250)

むかし相如といふ人ありけり。世にたぐひなき程にまづしくてわりなかりけれど、よろづの事をしり、才学ならびなくして、琴をぞめでたくひきけり。卓王孫といふ人のもとにゆきて、月のあかき夜、よもすがらきをしらべていたるに、この家主のむすめに卓文君ときこゆる人あはれにいみじくおぼして、つねはこれをのみめでけうじけるを、この文君がちちはは、相如にちかづく事をいとひにくみけれど、ことのねをやあはれと思しみにけん、このおとこにあひにけり。女がたのちち、よろづのたからにあきみちて、よのわびしきことをしらざいけり。かかれども、①このわび人にあひぐしたる事を、いと心づきなさまに思とりて、いかにもむすめのつくゑをしらざりけれど、露ちりくるしと思はでなん、とし月をすぐしける。

この夫、②蜀といふ国へ行けるみちに昇遷橋といふはしありけり。それをあゆみわたるとて、はしばしに物をかきつけけり。「我、大車肥馬にのらずば、又このはしをかへりわたらじ」とちかひて、蜀の国にこもりけり。そののちおもひのごとめでたくなりてなん、はしをかへりわたりける。女、としごろまづしくてあひぐしたるかひありて、したしきうとき世中の人びともたぐひなくうらやみける。

50) 注18)前掲書 卓文君、相如に嫁ぎ、相如出世の語。

しづみつつわがかきつけしことのはは 雲井にのぼるはしにぞありける
心ながくて身をもてけたぬは、今もむかしもなをいみじくこそきこゆれ。

まず、『唐物語』でもっとも目立つ部分は⑥の「昇遷橋を渡る時、出世するまででは帰らないと書きつけ、蜀にこもり、後に出世して渡った」であろう。④に例29-1の「文君の父が財物を渡す」場面がないことも異なるところであるが、⑥は「文君当壚」の後半の内容とも差がある。『唐物語』の後半は本来『蒙求』の「相如題柱」を原拠にする話である。

例29-3『蒙求』「相如題柱」

前漢の司馬相如、字は長卿。成都の人なり。蜀城の北七里にして昇遷橋有り。相如其の柱に題して曰く、「大丈夫駟馬の大車に乗らずんば、復た北の橋を過ぎじ」と。後に中郎将に遷りて蜀に入る。郡の守は郊に迎へ、県令は笮を負ひて先駟す。蜀人、相如を以て榮寵となす。

中国翻案説話集として『今昔』とほぼ同じ時期のものである『唐物語』が、『今昔』と相違を示しているのは、編者の主題への意識によるといえよう。『唐物語』編者は、貧困の中、夫婦の苦勞によって幸せになった夫婦の理想像を主題として、「文君当壚」と十26の父の財物部分を削除した。しかし、『今昔』編者は、説話の中で文君と相如の恋愛譚を中心に哀れを主題としている。

以上のように、漢籍と『今昔』巻十の共通話を比較分析することにより、和文資料の『今昔』への変容とは異なる特徴が浮き彫りになった。。和文資料は素材の蔵として役割を果たしたのに対して、漢籍資料はその原拠によって

相違な受容の形を示している。『今昔』の原拠となった漢籍資料の大部分は説話集ではない。また、漢籍には様々な思想が記されており、漢文知識が十分ではない当時の一般人にはその意味はかなり無理があった。このような理由で『今昔』編者は、広く知られていた漢籍の素材を借用したり、人物を歪曲したりすることで主題の変化を意図するところに用いたといえよう。

IV. 結論

震旦部の最後に位置する『今昔物語集』巻十は「国史」という表題がついている。それまでの「仏法」「孝養」とは範囲を異にする部類が明示されている。巻十に比べその出典資料が明瞭な震旦部の仏教説話に関する研究は多角的な面で研究が行われている。しかし、巻十は今日まで出典や原拠関係が不分明な資料が多くて、未だ出典の確認をめぐる多くの議論が繰り広げられている。また、巻十に関する研究は多数がその構成の問題に限られている。

本論文では、今までの確認である出典探しではなく、『今昔』編者の震旦説話に対する受容の方法に焦点を置いて考えてみた。以下、その考察の結果をまとめる。

第二章では、『今昔物語集』巻十と和文資料との関係を調べるために、まず、『俊頼髓脳』との共通話を中心にその伝承における受容の様相を考察してみた。『今昔』編者は『俊頼髓脳』から素材を借用して説話を伝承しながら、話末語評を付けることで、編者の目指す主題を新しく作り出した。このような『今昔』編者の受容方法は基本的に『俊頼髓脳』を出典とする他の説話の中でも一貫していた。

一方、従来『俊頼髓脳』との出典関係が明確になっていない二つの説話も、当時代の物語集や原拠と比較してみた。十5の論点となっているところは、『今昔』編者が『俊頼髓脳』の和歌部を除く時に和歌の代わりに作りかえて入れた部分であった。また、十7の論点となっているところは、『俊頼髓脳』が出典の基本であったが、当時すでにこの話は有名な説話

であったため、編者がこの話を収めた多くの資料に接した結果としてできたものと考えられる。

次に、『今昔』の日本的な資料の受容及び変容を調べるため、和文脈の『俊頼髓脳』以外、漢文体の『注好選』との共通話も比較分析した。特に『注好選』を漢籍『蒙求』の媒介作品と見なして、卷十と『注好選』との共通話だけではなく、卷十、『注好選』、『蒙求』の三書の共通話も比較分析した。『注好選』は漢文体の短い説話を収めているため、『俊頼髓脳』のようにほぼ一致する場合よりは、卷十の一つの説話の中で一つの逸話として伝承される例が多い。三書は素材を共通としているが、素材の展開において『蒙求』は『注好選』・『今昔』と相違があった。ところが、『今昔』と『注好選』は、登場人物の名や素材の活用において似ていた。

第三章では、『今昔』卷十の漢籍資料の受容関係を調べるために、『莊子』や『史記』との共通話を中心に検討してみた。漢籍との比較といっても、両書とも説話集ではなく、多様な経路で日本に伝えられたものであるゆえ、直接的な影響関係を認めることは無理であろう。しかし、『今昔』編者がどのような意識を持って、該当説話を受容したのかを明らかにしたところに意義があるといえる。

まず、『莊子』と卷十の共通話を比較分析した。先述した日本資料のように、『今昔』編者は原拠『莊子』にも異なる「篇」から逸話を取り、卷十において一つの説話として組み立てた。ところが、『今昔』の後代説話集『宇治拾遺物語』との共通話にも同文的な説話がうかがえることで、この組み立ては『今昔』編者によるものではなく、その以前にすでに日本化

された莊子説話が存在していたことをうかがわせる。

『莊子』 関連説話における重要な受容方法は主題の変容であるといえる。『今昔』 編者は、莊子思想の中で難しい部分を取り外したり、登場人物を歪曲させたりして、莊子思想を説話として組み立てた。この結果、主題は原拠『莊子』 から離れた形で展開している場合が少なくない。

一方、上のような主題変容は「孔子倒れ」や「後の千金」のような日本式成句の起源譚として役割にもつなぐ。つまり、孔子の儒教的な道德観を批判した『莊子』の思想は「孔子倒れ」となり、目前の危急な状況が迫っていることを示す「轍鮒の急」は、大きな援助も時機を失すれば効果がないことを示す「後の千金」となり、原拠とは相違な主題が生じた。

次に、『莊子』以外の漢籍資料として『史記』との共通話を比較分析した。卷十の『史記』 関連説話は「秦始皇」の代から始め、一つの王朝が終わると説話を終わらせる方式を取っている。このような説話の展開方式によって、一つに説話の中に該当王朝の多くのエピソードを圧縮して入れるため、『史記』から有名な素材が借用された。また、表題と借用した素材を合わせるために、登場人物の行為主体を変えたことも頻繁に行われており、エピソードの間に時間の倒置も行われた。『史記』が歴史的な見方で事件を展開することに対して、卷十は説話集としての立場を十分利用して、登場人物に神話的な特性を与えた。しかし、『史記』を原拠とする三話において、素材の借用はあったが、他例の説話のような主題変化は表われていない。特に、十3は未完の状態で作られており、これは『今昔』編者が資料を収集して、後で省略された話を入れようとしたが、結局、結語までに至らずに終わったためではないかと推測される。

最後に『莊子』や『史記』以外の漢籍として、『春秋左氏伝』と『蒙求』との共通話を比較してみた。『春秋左氏伝』を原拠とするのは、十23の前半部の話で、病鬼が膏肓に入る事を現夢するという素材がそのまま借用されていた。しかし、病気になる主体や夢を見る主体など、人物の変化があり、後半部は原拠とは全く違う後日譚が付けられている。即ち、『今昔』編者は「病、膏肓に入る」という成語の由来譚として故事を引いたように見える。

第二章で述べたように『蒙求』と『今昔』の直接的な影響関係は認められていないが、『蒙求』が漢籍の註釈書として当時に読まれたことから、『蒙求』との比較を試みた。その結果、登場人物は殆んど同じであるが、人物の性格や時代的な背景はすでに日本化され、話も簡略化されていた。また、同時代の『唐物語』とも類話を比較した。両話は同じ時期の説話でありながら主題を異にしていた。

編者は古来親しまれていた素材を借用して説話を作りかえながら、様々な変容方法を工夫した。編者の独創的創作だけでなく、『今昔』時代にすでに日本化されていた先代説話も震旦説話の受容に大きい役割を果たしたといえる。

従来の卷十に関する研究は、その構成と出典の問題に集中され、説話自体の研究はあまり進んでいなかった。本稿では、微弱であるが、日本の資料と漢籍との比較を通じて『今昔』卷十の震旦説話の受容関係を考察してみた。

参考文献

単行本

- ・ 新聞唯一 『宴曲集』 『中世近世歌謡集』 日本文学大系44
(岩波書店、1959年)
- ・ 国東文磨 『今昔物語集成立考』 (早稲田大学出版部、1976年、
初出1962)
- ・ 国東文磨 『今昔物語集 (9)』 講談社学術文庫(講談社、1984)
- ・ 竹内照夫 『春秋左氏伝 中』 全釈漢文大系 5 (集英社、1982年、
初出1972)
- ・ 吉田賢抗 『史記』 1~2 新釈漢文大系 38-39(明治書院 1985年、
初出1978)
- ・ 早川光三郎 『蒙求』 上・下 新釈漢文大系 58-59 (明治書院、
1985年、初出1973)
- ・ 池上洵一 『今昔物語集 9 震旦部』 東洋文庫(平凡社、1980年)
- ・ 池上洵一・藤本徳明(編) 『説話文学の世界』 (世界思想社、
1990年)
- ・ _____ 『新版今昔物語集の世界』 (以文社、2006年)
- ・ 小峯和明 『今昔物語集の形成と構造』 (笠間書院、1985年)
- ・ _____ 『宇治拾遺物語の表現時空』 (若草書房、1999年)
- ・ _____ (外) 『今昔物語集 二』 新日本古典文学体系33
(岩波書店、1999年)

- ・ _____ 『今昔物語集索引』新日本古典文学体系 別巻
（岩波書店、2001年）
- ・ 三木紀人(編) 『今昔物語集・宇治拾遺物語必携』(学灯社、
1988年)
- ・ 小町谷照彦(編) 『古典文学基礎知識必携』(学灯社、1991年)
- ・ 馬淵和夫(外) 『三宝絵 注好選』新日本古典文学体系31(岩波
書店、 1997年)
- ・ 竹尾利夫(外) 『古典文学概論』(新典社、1997年)
- ・ 内田泉之助 『白氏文集』中国古典新書(明德出版社、1997年)
- ・ 安部吉雄 『莊子』中国古典新書(明德出版社、1997年)
- ・ 野村純一(編) 『昔話・伝説必携』(学灯社、1998年)
- ・ 西郷信綱(外) 『日本文学の古典』(岩波書店、2001年、初出1966)
- ・ 橋本不美男 『俊頼髓脳』新編日本古典文学全集87 『歌論集』
（小学館、2001年）
- ・ 小林保治 『唐物語』全訳注(講談社学術文庫、2003年)
- ・ 滝康秀(編) 『史記<本紀>』新書漢文大系(明治書院、2003年)
- ・ 諸橋轍次 『中国古典名言事典』(講談社学術文庫、2005年)
- ・ 川口久雄 全訳注 『和漢朗詠集』(講談社学術文庫、2005年)
- ・ 三沢勝己(編) 『蒙求』新書漢文大系(明治書院、2005年)

論文

- ・ 橋健二 「『今昔物語集』と『俊頼髓脳』との関係」 『奈良女子大学
附属高校研究紀要』 5集(奈良女子大学附属中等教育

学校、1962年12月)

- ・ 今野達 「『今昔物語集』の成立に関する諸問題一『俊頼髓脳』との関係を糸口に一」 『解釈と鑑賞』臨時増刊号
(至文堂、1963年1月)
- ・ 森正人 「説話形成と藤氏史・兵史」 『国語と国文学』56巻10号
(東京文理科大学国語国文学会、1979年10月)
- ・ _____ 「『今昔物語集』は誰によってなぜ書かれたのか」 『国文学』
(学灯社、1984年11月)
- ・ 池上洵一 「原話との乖離一基盤と作品世界」 『国文学』
(学灯社、1984年7月)
- ・ 宮田尚 「『今昔物語集』の標題をめぐる二・三の問題」 『日本文化研究』4号(韓国外国語大 日本文化研究会、1989年)

ABSTRACT

A Study on the Tenth Volume
of Konjakumonogatarisyu
-Centering on the Type of Transformations
in Sindan Tales-

Shin, Hyo-ra

Department of Japanese

Language & Literature

Graduated School of

Sungshin Women's University

This study investigated the type of acceptance and changes with the text of secular tales for the Jindan part in the tenth volume of KONJAKUMONOGATARISYU, which is the largest collection of Japanese tales through prior literatures related to effects. While prior studies on the tenth volume had been limited to tracking the source or to the composition of the volume, this study analyzed tales as compared with common tales in the previous age to categorize them into accepted

and transformed groups. As for transformations, particularly, just changes in plot were not indicated but an attempt was made to analyze aspects of multilateral changes primarily in characters, materials, and themes in search of a tendency.

Chapter 2 made a comparative analysis for common things with TOSIYORIZUINOU of Ganamun indicated as a reliable source of the current tenth volume, among Japanese literatures in the previous age, in order to clarify acceptance relations. Another comparative analysis was made for common things with CYUKOUSEN, which is a collection of Chinese-written tales, in order to determine what acceptance relations it had with the tenth volume. On the other hand, a 3D comparative analysis was made, including a Chinese book MOUGYU, for common things to determine how Juhoseon written in Chinese as a medium of a Chinese book affected the tenth volume. Chapter 3 compared tales in the tenth volume, whose source had not been discovered yet, with a Chinese book as its basis for common things in order to investigate relations between its acceptance and changes. To begin with, since four tales in the tenth volume originated in SOUSI, a comparative analysis was made for common things.

By the first three tales based on Sagi in the tenth volume, the editor tried to convey historical facts rather than to

express a sense of theme, during which process he borrowed a typical material of Sagi to create a new tale. And a comparative analysis was made with Monggu and Chunchujwassijeon containing not many tales as in the basis for common things to investigate aspects of acceptance and changes.